KH261-J4
1200901104340

道理

小說集

菊池寛著
平福百穂裝畫

東京
春陽堂版

道理

小說集

菊池寛著

平福百穂裝畫

東京 春陽堂版

道理

菊池寛著

KH261-J4

I種
W

12009011104340

目次

入れ札……一
蘭學事始……一九
亂世……七五
義民甚兵衛……一三
征南奇聞……一四
マスク……一五九

天の配劑……一七三
ある青年……一八三
祝盃……一九一
姉の覺書……二〇一
島原心中……二三七
妻の非難……二七九
啓吉の誘惑……二八七

入れ札

裝幀

平福百穂

上州岩鼻の代官を斬り殺した國定忠次一家の者は、赤城山へ立て籠つて、八州の捕方を避けて居たが、其處も防ぎ切れなくなると、忠次を初、十四五人の乾兒は、辛く一方の血路を、斫り開いて、信州路へ落ちて行つた。

夜中に利根川を渡つた。澁川の橋は、捕方が固めて居たので、一里ばかり下流を渡つた。水勢が烈しいため、兩岸に綱を引いて渡つたが、それでも乾兒の一人は、つひ手を離したゝめ流されてしまつた。

澁川から、伊香保街道に添ふて、道もない裏山を、榛名にかゝつた。一日一晩で、やつと榛名を越えた。が、榛名を越えてしまふと、直ぐ其處に大戸の御番所があつた。

信州へ出るのには、この御番所が、第一の難關であつた。此の關所をさへ越してしまへば、向ふは信濃境まで、山又山が續いて居る丈であつた。

忠次達が、關所へかゝつたのは、夜の引き明けだつた。わづか、五六人しか居ない役人達は、忠次達の勢に怖れたものか、彼等の通行を一言も咎めなかつた。

關所を過ぎると、遉に皆は、ほつと安心した。本街道を避けて、裏山へかゝつて來るに連れて、夜がしらじらと明けて來た。丁度、上州一圓に、春蠶が孵化うとする春の終の頃であつた。山上から見下すと、街道に添ふた村々には、青い桑畑が、朝靄の裡に、何處までも續いて居た。

關東縞の袷に、鮫鞘の長脇差を佩して、脚袢草鞋で、嚴重な足こしらへをした忠次は、菅のふき下しの笠を冠つて、先頭に立つて、威勢よく歩いて居た。小鬢の所に、疵痕のある淺黑い顏が、一月に近い辛苦で、少し窶れが見えたゝめ、一層凄味を見せて居た。乾兒も、大抵同じやうな風體をして居た。が、忠次の外は、誰も菅笠を冠ぶつて

は居なかつた。中には、片袖の半分斷れかけて居る者や、脚袢の一方ない者や、白つぽい縞の着物に、所々血を滲ませて居るものなども居た。

街道を避けながら、而も街道を見失はないやうに、彼等は山から山へと辿つた。大戸の關から、二里ばかりも來たと思ふ頃、雜木の茂つた小高い山の中腹に出て居た。ふと振り顧ると、今まで見えなかつた赤城が、山と山の間に、ほのかに浮び出て居た。

「赤城山も見收めだな。おい、此所いらで一服しやうか」

さう云ひながら、忠次は足下に大きい切り株を見付けて、どつかりと、腰を降した。彼の眼は、暫らくの間、四十年見なれた懷しい山の姿に囚はれて居た。赤城山が利根川の谿谷へと、緩い勾配を作つて居る一帶の高原には、彼の故郷の國定村も、彼が賣出しの當時、島村伊三郎を斬つた境の町も、彼が一月前に代官を斬つた岩鼻の町もあつた。

國越をしやうとする忠次の心には、さすがに淡い哀愁が、感ぜられて居た。が、そ

れよりも、現在一番彼の心を苦しめて居ることは、乾兒の仕末だつた。赤城へ籠つた當座は、五十人に近かつた乾兒が、日數が經つに連れ、二人三人潛かに、山を降つて逃げた。捕方の總攻めを喰つたときは、廿七人しか殘つて居なかつた。それが、五六人は召捕られ、七八人は何處ともなく落ち延びて、今殘つて居る十一人は、忠次のためには、水火をも辭さない金鐵の人々だつた。國を賣つて、知らぬ他國へ走しる以上、此先あまり、いゝ芽も出さうでない忠次のために、一緒に關所を破つて、命を投げ出して呉れた人々だつた。が、代官を斬つた上に、關所を破つた忠次として、十人餘の乾兒を連れて、他國を横行することは出來なかつた。人目に觸れない裡に、乾兒の仕末を付けてしまひたかつた。が、みんなと別れて、一人限になつてしまふことも、いろ〳〵な點で不便だつた。自分の目算通に、信州追分の今井小藤太の家に、ころがり込むにした所が、國定村の忠次とも云はれた貸元が、乾兒の一人も連れずに、顏を出すことは、沽劵にかゝはることだつた。手頃の乾兒を二三人連れて行くとしたら、一體

誰を連れて行かう。さう思ふと、彼の心の裡では、直ぐその顏觸が定つた。平生の忠次だつたら、

「おい！　淺に、喜藏に、嘉助とが、俺と一所に來るんだ！　外の野郎達は、銘々思ひ通に落ちて呉れ！　路用の金は、別けてやるからな！」

と、何の拘泥もなく云へる筈だつた。が、忠次は赤城に籠つて以來、自分に對する乾兒達の忠誠を、しみじみ感じて居た。鰹節や生米を嚙ぢつて露命を繋ぎ、岩窟や樹の下で、雨露を凌いで居た幾日と云ふ長い間、彼等は一言も不平を滾さなかつた。忠次の身體が、赤城山中の地藏山で、危險に瀕したとき、みんなは命を捨てゝ働いて呉れたり、平生老ぼれて、物の役には立つまいと思はれて居た闇雲の忍松までが、見事な働きをした。

さうした乾兒達の健氣な働きと、自分に對する心持とを見た忠次は、その中の二三人を引き止めて、他の多くに暇をやることが、何うしても氣がすゝまなかつた。皆一

様に、自分のために、一命を捨てゝかゝつて居る人々の間に、自分が甲乙を付けることは、何うしても出來なかつた。剛愎な忠次も、打ち續く艱難で、少しは氣が弱くなつて居る故もあつたのだらう。別れるのなら、いつそ皆と同じやうに、別れようと思つた。

彼は、さう決心すると、

「おい！　みんな！」と、周圍に散かつて居る乾兒達を呼んだ。烈しい叱り付けるやうな聲だつた。喧嘩の時などにも、叱咤する忠次の聲丈は、狂奔して居る乾兒達の耳にもよく徹した。

草の上に、蹲まつたり、寢ころんだり、銘々思ひ〳〵の休息を取つて居た乾兒達は、忠次の一喝で、みんな起き直つた。數日來の烈しい疲勞で、とろ〳〵眠りかけて居るものさへあつた。

「おい！　みんな」

忠次は、改めて呼び直した。「壺皿見透し」と、若い時仇名を付けられて居た、忠次の大きい眼がギロリと動いた。

「みんな！　一寸耳を貸して貰ひてえのだが、俺これから、信州へ一人で落ちて行かうと思ふのだ。お前達を、連れて行きてえのは山々だが、お役人をたゝき斬つて、天下のお關所を破つた俺達が、お天道樣の下を、十人二十人つながつて歩くことは、許されねえ。もつとも、二三人は、一緒に行つて貰ひてえとも思ふのだが、今日が日まで、同じ辛苦をしたお前達みんなの中から、汝は行け汝は來るなと云ふ區別は付けたくねえのだ。連れて行くからなら、一人殘らず、みんな一緒に連れて行きてえのだ。さあ、別れるからなら、恨みつこのないやうに、みんな一樣に別れてしまひてえのだ。さあ、茲に使ひ殘りの金が、百五十兩ばかりあらあ。みんなに、十二兩宛、呉れてやつて、殘つたのは俺が貰つて行くんだ。銘々に、志を立てゝ落ちて呉れ！　隨分、身體に氣を付けろ！　忠次が何處かで捕まつて、江戸送りにてもなつたと聞いたら、線香の一本

でも上げて呉れ！」

忠次は、元氣にさう云ふと、胴卷の中から、五十兩包みを、三つ取り出して、熊笹の上に、づしりと投げ出した。

が、誰もその五十兩包みに、手を出すものはなかつた。みんなは、忠次の突然な申出に、何う答ていゝか迷つて居るらしかつた。一番に、乾兒達の沈默を破つたのは、大間々の淺太郎だつた。

「そりや、親方惡い了簡だらうぜ。一體俺達が、妻子眷族を見捨てゝ、此處までお前さんに、從いて來たのは、何の爲だと思ふのだ。みんな、お前さんの身の上を氣遣つて、お前さんの落着く所を、見屆けたいと思ふ一心からぢやないか。いくら、大戸の御番所を越して、もうこれから信州までは、大丈夫だと云つたところで、お前さんばかりを、一人で手放すことは、出來るものぢやねえ。尤も、かう物凄な野郎ばかりが、つながつて歩けねえのは、道理なのだから、お前さんが、此奴だと思ふ野郎を、名指し

てお呉んなせえ。何も親分乾兒の間で、遠慮することなんか、ありやしねえ。お前さんの大事な場合だ！　恨みつらみを云ふやうな、ケチな野郎は一人だつてありやしねえ。なあ兄弟！」

みんなは、異口同音に、淺太郎の云ひ分に賛意を表した。が、さう云はれて見ると忠次は尙更選みかねた。自分の大事な場所である丈に、彼等の名前を指すことは、彼等に對する信頼の差別を、露骨に表はす事になつて來る。それで、選に洩れた連中と——內心、忠次を怨むかも知れない連中と——其儘、再會の機も期し難く、別れてしまはねばならぬ事を考へると、忠次は如何うしても、氣が進まなかつた。

忠次は口を銜んだ儘、何とも答へなかつた。親分と乾兒との間に、不安な沈默が暫らく續いた。

「あゝ、いゝ事があらあ」釋迦の十藏と云ふ未だ二十二三の男が叫んだ。彼は忠次の盃を貰つてから、未だ二年にもなつて居なかつた。

「籤引がいゝや、みんなで籤を引いて、當つた者が親分のお供をするのがいゝや」

當座の妙案なので、忠次も、乾兒達も、十藏の方を一寸見た。が、嘉助といふ男が直ぐ反對した。

「何を云つてやがるんだい！　籤引だつて！　手前の樣な靑二才に籤が當つて見ろ、反つて、親分の手足纏ひぢやないか。籤引なんか、俺ぁ眞つ平だ。此處時に一番物を云ふのは、腕つ節だ。おい親分、くだらねえ遠慮なんかしねえて、一言、嘉助ついて來いと、云つてお呉んなせい」

四斗俵を兩手に提げ乍ら、足駄を穿いて歩くと云ふ嘉助は一行中で第一の大力だつた。忠次が心の裡で選んで居る三人の中の一人だつた。

「嘉助の野郎、何を大きな事を云つてやがるんだい。腕つ節ばかりで、世間は渡られねえぞ。まして、此れから、知らねえ土地を遍歷つて、上州の國定忠次で御座いと云つて歩くには、駈引萬端の軍師がついて居ねえ事には、どうにもならねえのだ。幾ら

手前が、大力だからと云つて、ドヂ許りを踏んで居ちや、旅先で、飯にはならねえぞ」

さう云つたのは、松井田の喜藏と云ふ、分別盛りの四十男だつた。忠次も喜藏の才覺と、分別とは認めて居た。彼は、心の裡で喜藏も三人の中に加へて居た。

「親分、俺あお供は出來ねえかねえ。俺あ腕節は强くはねえ。又、喜藏の樣に軍師ぢやねえ。が、お前さんの爲には、一命を捨てゝもいゝと、心の內で、とつくに覺悟を極めて居るんだ」

闇雲の忍松が、其處迄云ひかけると、乾兒達は、周圍から、口々に罵つた。

「何を云つてやがるんだい、親分の爲に命を投げ出して居る者は、手前一人ぢやねえぞ、巫山戲た事をぬかすねえ」

さう云はれると、忍松は一言もなかつた。半白の頭を、チレ隱しに搔いて居た。

さうして居るうちに、半時ばかり經つた。日光山らしい方角に出た朝日が、もう餘

程さし登つて居た。忠次は、默々として、みんなの云ふ事を聽いて居た。二三人連れて行くとしたら、彼は籤引ては連れて行きたくなかつた。やつぱり、信頼の出來る乾兒を選びたかつた。彼は不圖一策を思ひ付いた。それは、彼が自ら選ぶ事なくして、最も優秀な乾兒を選み得る方法だつた。

「お前達の樣に、さうザワ〳〵騷いて居ちや、何時が來たつて、果てしがありやしねえ。俺一人を手離するのが不安心だと云ふのなら、お前達の間て入れ札をして見ちやどうだい。札數の多い者から、三人丈連れて行かうぢやねえか。こりや一番怨みつらみがなくつて、いゝだらうぜ」

忠次の言葉が終るか終らないかに、

「そいつあ思ひ付きだ」乾兒のうちて一番人望のある喜藏が賛成した。

「そいつぁ趣向だ」大間々の淺太郎も直ぐ賛成した。

心の裡で、籤引を望んで居る者も數人あつた。が、忠次の、怨みつらみの無いやう

に然も役に立つ乾兒を、選ばうと云ふ肚が解ると、みんなは異議なく入れ札に賛成した。

喜藏が矢立を持つて居た。忠次が懷から、鼻紙の半紙を取り出した。それを喜藏が受取ると、長脇差を拔いて、手際よくそれを小さく切り分けた。さうして、一片宛みんなに配つた。

先刻からの經路を、一番厭な心で見て居たのは稻荷の九郎助だつた。彼は年輩から云つても、忠次の身内では、第一の兄分でなければならなかつた。が、忠次からも、乾兒からも、そのやうには扱はれて居なかつた。去年、大前田の一家と一寸した出入のあつた時、彼は喧嘩場から、不覺にも大前田の身内の者に、引つ擔がれた。それ以來彼は多年培つて居た自分の聲望がめつきり落ちたのを知つた。自分から云へば、遙かに後輩の淺太郎や喜藏に段々凌がれて來た事を、感じて居た。そればかりでなく、十年前迄は、兄弟同樣に賭場から賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次迄が何時となく、自

分を輕んじて居る事を知つた。皆は表面こそ「阿兄！阿兄！」と立てゝ居るもの、心の裡では、自分を重んじて居ないことが、あり〳〵と感ぜられた。

入れ札と云ふ聲を聽いたとき、九郎助は惡いことになつたなあと思つた。今迄、表面丈は兎も角も保つて來た自分の位置が、露骨に崩されるのだと思ふと、彼は厭な氣がした。十一人居る乾兒の中で、自分に入れて呉れさうな人間を考へて見た。が、それは彌助の他には思ひ當らなかつた。彌助も九郎助と同樣に、古い顏であつて、後輩の淺太郎や喜藏などが、グン〳〵頭を擡げて來るのも、常から快からず思つて居るから、かうした場合には、屹度自分に入れて呉れるだらうと思つた。が、彌助丈は自分に入れて呉れるとしても、彌助の一枚丈で、三人の中に這入ることは考へられなかつた。淺太郎には四枚は這入るだらうと思つた。喜藏に三枚這入るとして、十一枚の中、後へ四枚殘る。その中、自分の一枚のけると三枚殘る。若し、その中二枚が、自分に入れられて居れば、三人の中に加はることが出來るかも知れないと思つた。が、彌助の

他に、自分に入れて呉れさうな人は、どう考へても當がなかつた。ひよつとしたら、並川の才助がとも思つた。あの男の若い時には、可成り世話を燒いてやつた覺えがある。が、それは六七年も前の事で、今では「淺阿兄、淺阿兄」と、淺にばかりくつ付いて居る。さう思ふと、彌助の入れて呉れる一枚の他には、今一枚を得る當は、何うにもつかなかつた。乾兒の中で年頭でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは——自分の信望が少しも無いことがまざ〳〵と表はれることは、もう既定の事實のやうに、九郎助には思はれた。不愉快な寂しい感じに堪へられなくなつて來た。

一本しか無い矢立の筆は、次から次へと廻つて來た。

「おい！　阿兄！　筆をやらあ」

ぼんやり考へて居た九郎助の肩を、つゝきながら横に居た彌助が、筆を渡して呉れた。彌助は筆を渡すときに、九郎助の顏を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑つた。

それは、たしかに好意のある微笑だつた。「お前を入れたぜ」と云ふやうな、意味を持つた微笑であるやうに九郎助は思つた。さう思ふと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなつた。後の一枚が、自分の生死の境、榮辱の境であるやうに思はれた。忠次に着いて行つたところで、自分の身に、いゝ芽が出やうとは思はれなかつたが、入れ札に洩れて、年甲斐もなく置き捨てにされることが何うしても堪らなかつた。淺太郎や喜藏の人望が、自分の上にあることが、マザ〳〵と分ることが、何うしても堪らなかつた。

かれは、筆を持つて、ぼんやり考へた。

「おい！　阿兄！　早く廻してくんな！」

横に坐つて居る淺太郎が、彼に云つた。阿兄！　と云ひながらも、語調丈は、目下を叱して居るやうな口調だつた。九郎助は、毎度のことながらむつとした。途端に相手に對する烈しい競爭心が――嫉妬がムラ〳〵と彼の心に渦卷いた。

筆を持つて居る手が、少しブル〳〵顫えた。彼は、紙を身體で掩ひかくすやうにしながら、假名で「くろすけ」と書いた。

書いてしまふと、彼はその小さい紙片をくる〳〵と丸めて、眞中に置いてある空になつた割籠の蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、苦い悔悟が胸の中に直ぐ起つた。

「賭博は打つても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな」

口癖のやうに、怒鳴る忠次の聲が、耳のそばで、ガン〳〵鳴りひびくやうな氣がした。彼は皆が、自分の顏を、ジロ〳〵見て居るやうな氣がして、何うしても顏を上げることが出來なかつた。

吉井の傳助は、無筆だつたので、彼は仲よしの才助に、小聲で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまふと、忠次が、

「喜藏！　お前讀み上げて見ねえ！」と言つた。

皆は、緊張のために、眼を輝した。過半數のものは諦めて居たが、それでも銘々、うぬぼれは持つて居た。壺皿を見詰めるやうな目付で、喜藏の手許を睨んで居た。

「あさ、あゝ淺太郎の事だな、淺太郎一枚！」

さう叫んで喜藏は、一枚札を別に置いた。

「淺太郎二枚！」彼は續いてさう叫んだ。

又、淺太郎が出たのである。淺太郎が、此の二三年忠次の親任を得て、影の形に付き從ふやうに、忠次が彼を身邊から放さなかつたことは、乾兒の者が皆よく知つて居た。淺太郎の聲が、つゞくと忠次の淺黑い顏に、ニッと微笑が浮かんだ。

「喜藏が一枚！」

喜藏は、自分の名が出たのを、嬉しさうに、ニコリと笑ひながら叫んで、

「嘘ぢやねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次ぎが又、喜藏だ！」

喜藏は得意げに、又紙札を高く差上げた。

「嘉助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、私に選んで居る三人が、入札の表に現はれて來るのが、嬉しかつた。乾兒達が自分の心持を、察して居て呉れるのが嬉しかつた。

「何だ！　くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜藏は、聲高く叫んだ。九郎助は顏から火が出るやうに思つた。生れて初て感ずるやうな羞耻と、不安と、悔恨とで、胸の裡が搔きむしられるやうだ。自分の手蹟を、喜藏が見覺えては、居はしないかと思ふと、九郎助は立つても坐つても居られないやうな氣持だつた。が、喜藏は九郎助の札には、こだはつて居なかつた。

「淺が三枚だ！　その次は、喜藏が三枚だ！」

喜藏は、大聲に叫びつゞけた。札が次ぎ〳〵に讀み上げられて、喜藏の手にたつた一枚殘つたとき、淺が四枚で、喜藏が四枚だつた。嘉助と九郎助とが、各自一枚宛だ

つた。

九郎助は、心の裡で懸命に彌助の札が出るのを待つて居た。彌助の札が出ないことはないと思つて居た。もう一枚さへ出れば、自分が、三人の中に這入るのだと思つて居た。

が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切つて、嘉助に投ぜられた札だつた。

「さあ！　みんな聞いてくれ！　淺と喜藏とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑はしいと思ふ奴は、自分で調べて見るといゝや」喜藏は最後の決定を傳へながら、一座を見廻した。

誰も調べて見ようとはしなかつた。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。

忠次は自分の思ひ通りの人間に、札が落ちたのを見ると滿足して、切り株から、立ち上つた。

「ぢや、みんな腑に落ちたんだな。それぢや、淺と喜藏と嘉助とを連れて行かう。九

郎助は、一枚入つて居るから連れて行きたいが、最初云つた言葉を變改することは出來ねえから、勘辨しな。さあ、先刻からえらう手間を取つた。ぢや、みんな金を別けて銘々に志すところへ行つて呉れ」

乾兒の者は、忠次が出してあつた裡から、銘々に十二兩宛を別けて取つた。

「ぢや、俺達は一足先に行くぜ」忠次は選まれた三人を、麾くと、みんなに最後の會釋をしながら、頂上の方へぐんぐん上りかけた。

「親分、御氣嫌よう。御氣嫌よう」

去つて行く忠次の後から、乾兒達は口々に呼びかけた。

忠次は、振り向きながら、時々、被ぶつて居る菅笠を取つて振つた。その長身の身體は、山の中腹を掩ふて居る小松林の中に、暫くの間は見え隱れして居た。

取り殘された乾兒達の顏には、それぞれ失望の影があつた。

「淺達が付いて居りや、大した間違はありやしねい！」

口々に同じやうなことを云つた。が、やつぱり、銘々自分が入れ札に洩れた淋しさを持つて居た。

が、忠次達の姿が見えなくなると、四五人は諦めたやうに、草津の方へ落ちて行つた。

九郎助は、忠次と別れるとき、目禮したまゝぢつと考へて居た。落選した失望よりも、自分の淺ましさが、ヒシヒシ骨身に徹へた。札が、二三人に蒐まつて居るところを見ると、みんな親分の爲を計つて、淺や喜藏に入れたのだ。親分の心を汲んで、淺や喜藏を選んだのだ。さう思ふと、自分の名をかいた卑しさが、愈々堪へられなかつた。

朝の微風が吹いて來て、入れ札の紙が、熊笹を離れて、ひら〳〵と飛びさうになつた。

「あゝ、こんなものが殘つて居ると、とんだ手がゝりにならねえとも限らねえ」

さう云ひながら、九郎助は立ち上つて散ばつて居る紙片を取り蒐めると、めちやめちやに引き斷つて、投げ捨てた。九郎助の顏は、凄いほどに蒼かつた。

「俺、秩父の方へ落ちようかな」

九郎助は獨言のやうに云つた。彼は仲間の誰とも顏を合して居るのが嫌だつた。秩父に遠緣の者が居るのを幸に、其處で百姓にでもなつてしまひたかつた。

彼は、草津へ行つた連中とは、反對に榛名の西南の麓を目ざして、ぐん〳〵山を降りかけた。

彼が、二三町も來たときだつた。後から聲をかけるものがあつた。

「おい阿兄！　稻荷の阿兄！」

彼は、立ち止つて振り顧つた。見ると、彌助が、息を切らしながら、追ひかけて來たのであつた。彼は彌助の顏を見たときに、烈しい憎惡が、胸の裡に湧いた。大切な場合に自分を裏切つて居ながら、また身の振方をでも相談しやうとするらしい相手の、

圖々しい態度を見ると、彼はその得手勝手が、叩き切つてやりたいほど、癪に障つた。

「俺、よつぽど草津から越後へ出ようと思つたが、よく考へて見ると、熊谷在に伯父が居るのだ。少しは、熊谷は危險かも知れねえが、故郷へかへる足溜りには持つて來いだ。それで俺も武州の方へ出るから、途中まで付き合つて呉れねえか」

九郎助は、返事をする事さへ嫌だつた。默つてすたこら歩いて居た。

彌助は、九郎助が機嫌が惡いのを知ると、傍へ寄つた。

「俺あ、今日の入れ札には、最初(はな)から嫌だつた。親分も親分だ！　餓鬼の時から一緒に育つたお前を連れて行くと云はねえ法はねえ。淺や喜藏は、いくら腕節や、才覺があつても、云はゞ、お前に比ぶればホンの子僧つ子だ。たとひ、入れ札にするにしたところが、野郎達が、お前を入れねえと云ことはありやしねえ。十一人の中でお前の名をかいたのは、この彌助一人だと思ふと、俺あ彼奴等の心根が、全くわからねえや」

默つて聞いた九郎助は、火のやうなものが、身體の周圍に、閃めいたやうな氣が

した。

「此の野郎！」

さう思ひながら、脇差の柄を、左の手で、グッと握りしめた。もう、一言云つて見ろ、拔打ちに、斬つてやらうと思つた。が、九郎助が火のやうに、怒つて居ようとは夢にも知らない彌助は、平氣な顏をして寄り添つて、歩いて居た。

柄を握りしめて居る九郎助の手が、段々緩んで來た。考へて見ると、彌助の嘘を咎めるのには、自分の恥しい卑しさを打ち開けねばならない。

その上、自分に大嘘を吐いて居る彌助でさへ、自分があんな卑しい事をしたのだとは、夢にも思つて居なければこそ、こんな白々しい嘘を吐くのだと思ふと、九郎助は自分で自分が情けなくなつて來た。口先丈の嘘を平氣で云ふ彌助でさへが考へ付かないほど、自分は卑しいのだと思ふと、頭の上に輝いて居る晩春のお天道樣が、一時に暗くなるやうな味氣なさを味はつた。

山の多い上州の空は、一杯に晴れて居た。峰から峰へ渡る幾百羽と云ふ小鳥の群が、黄い翼をひらめかしながら、九郎助の頭の上を、ほがらかに鳴きながら通つて居る。行手には榛名が、空を劃つて蒼々と、聳えて居た。

蘭學事始

一

杉田玄白が、新大橋の中邸を出て、本石町三丁目の長崎屋源右衞門方へ着いたのは、巳刻を少し廻つたばかりだつた。

が、顔馴染の番頭に案内されて、通辭西善三郎の部屋へ通つて見ると、昨日と同じやうに、良澤はもうとつくに來たと見え、悠然と坐り込んで居た。

玄白は、善三郎に挨拶を濟すと、良澤の方を振向きながら、

「お早う！　昨日は、失禮致し申した。」と、挨拶した。

が、良澤は、光澤のいゝ總髮の頭を、輕く下げた丈で、その白哲な、鼻の隆い、薄

菊石のある大きい顔を、ニコリともさせなかつた。

玄白は、毎度のことだつたが、一寸嫌な氣がした。

彼は、中津侯の醫官である前野良澤の名は、豫てから知つて居た。そして、その篤學の評判に對しても、可なりな敬意を拂つて居た。が、親しく會つて見ると、不思議に、此の人に親しめなかつた。

彼は、今迄に五六度も、茲で良澤と一座した。去年加比丹(カピタン)が、此の客館に逗留して居た時にも、二度ばかり落合つたことがある。今年も月の廿日に加比丹(カピタン)が、江戸に着いてから、今日で七日にもなる間、玄白は三四度も、良澤と一座した。

それで居て、彼はどうにも此の人に親しめなかつた。それかと云つて、彼は良澤を嫌つて居るのでもなければ、憎んで居るのでもなかつた。たゞ、一座する度に、彼は良澤から、妙な威壓を感じた。彼は、良澤と一座して居ると、良澤が居ると云ふ意識が、彼の神經にこびり付いて離(はな)れなかつた。良澤の一擧一動が氣になつた。彼の一顰

一笑が氣になつた。彼が、氣にしまいとすればするほど、氣になつて仕方がなかつた。

それだのに、相手の良澤が、自分のことなどは、殆ど眼中に置いて居ないやうな態度を見ると、玄白は良澤に對する心持を、愈々こぢらせてしまはずには居られなかつた。

長崎表での蘭館への出入は、常法があつて、可なり嚴しく取締られて居たが加比丹(カピタン)が、江戸に逗留中の旅宿である、此の長崎屋への出入は、暫くの間の事とて、自然何の構もなき姿であつた。

從つて、和蘭陀流の醫術、本草、物產、究理の學問に志ある者を初、好事の旗本富商の輩までが毎日のやうに、押しかけて居た。

殊に御醫師の、野呂玄丈や、山形侯の醫官安富寄碩、同藩の中川淳庵、藏前の札差で、好事の名を取つた青野長兵衞、讃岐侯の浪人平賀源內、御坊主の細井其庵、御儒者の大久保水湖などの顏が見えぬことは、稀だつた。

さうした一座は、覺束ない内通辭を通じて、加比丹にいろ〳〵な質問をした。それが、大抵は阿蘭陀の異風異俗に就ての、たわいもない愚問であることが多かつた。加比丹の答に依つて、それが愚問であることが分ると、皆は腹を抱へて笑つた。

また、ウエールガラス（晴雨計）や、テルモメートル（寒暖計）や、ドンドルガラス（震雷驗器）などを、見せられると、彼等は、子供が珍らしい玩具にでも、接したやうに欣んで騒いだ。

が、こんな時、一座を冷然と見下すやうに坐つて居るのは良澤だつた。彼は、みんなが發するやうな愚問は、決して發しなかつた。彼は、初から終まで、冷笑とも微笑とも付かない薄笑ひを、唇の端に浮べながら默つて聽いて居た。

一座が、たわいもなく笑つても、彼のしつかりと、閉された口は、容易にほころびなかつた。

が、ある問題で、一座が問ひ疲れて、自然に靜かになつた頃に、良澤は定まつて、

一つ二つ問ひ質した。一座の者には、その質問の意味が、分らないことさへ多かつた。が、加比丹が、通辭から、その質問を受取ると、彼はいつも、駭いたやうに、目を刮りながら、急に眞面目な態度になつて、長々と答へるのが常だつた。

一座の者は、良澤のさうした——彼一人高しとして居るやうな態度を、少しも氣に止めて居ないらしかつたが、玄白丈はそれが、妙に氣になつて仕方がなかつた。

つひ、昨日もこんな事があつた。それは云つて見れば、何でもないことだが、加比丹のカランスが、座興の爲だつたのだらう、小さい袋を取り出して、皆に示した。通辭は、加比丹の意を受けて、こんなことを云つた。

「カランス殿の云はれるには、此の袋の口を、試みに開けて御覽じませ。見事明けた方に此の袋を進ぜられるとあるのぢや。」

カランスは、一面に髯の生えた顏の相恰を崩して、ニコニコ笑つて居た。

一座は、可なり打ち興じた。一番に、細井其庵が、手に取り上げた。が、性急な彼

は、暫らくいぢつて居たかと思ふと、直ぐ投げ出してしまつた。

「どれ〳〵拙者が、」と、安富寄碩が、仔細らしく取上げたが、これも暫らく考へて居たかと思ふと、思案に餘つて投げ出してしまつた。その袋は、一座の者の手から手へ渡つた。一人一人失敗する毎に、一座は聲高く笑つた。カランスは皆が開けかねて居るのを、嬉しさうに、ニコ〳〵見て居た。

玄白の手許に來たとき、彼もニコ〳〵笑ひながら取り上げた。袋の口には、金具が付いて居た。それは、恐らく智惠の輪の仕掛になつて居たのだらう。玄白は、所々を押したり引いたりして見たが、口は一分も開かなかつた。

彼は、到頭持て餘した。彼は、苦笑しながら、それを次ぎの者に讓らうとした。その時に、一座の者は、大抵それを試みて居た。たゞ玄白の右手に、坐つて居る良澤丈には、彼が餘り端然と控えて居るために、誰もがそれを手渡し兼て居た。

「前野氏、如何て御座る？」

玄白は、氣輕にそれを良澤に、手渡さうとした。が、良澤は、冷然として、それを受取らうとはしなかつた。彼は、恐らく一座の者が、つまらない玩び物て、打ち興じて居ることが、餘りに苦々しく思はれたのだらう。否、士大夫ともあるべきものが、つまらない玩び物で、加比丹から體よく飜弄されて居ることを苦々しく思つたのだらう。彼は、玄白が差し出したその袋を、見向かうともしなかつた。

その袋は、玄白と良澤との中間に、置かれたまゝ、一座は一寸白けかゝつて居た。が、丁度その時、折よく平賀源内が、遲れては入つて來た。彼は、その袋の事を、一座の者から聽くと、それを無雜作に、取上げたかと思ふと、忽ち口を開けてしまつた。

一座は、源内の奇才を賞する聲で、充ち滿ちた。彼の奇才は、一座の白けかゝるのを救つたのである。

が、玄白の良澤に對する、意地とも反感とも付かぬ物は、彼の心の中て、此時から

だん〳〵判然とした形を、取りかけて居た。

玄白は、良澤が一座に居ると、心に思ひ浮ぶ質問の半分も、口に出すことが、出來なかつた。良澤には、自分の訊いて居ることが、もうとつくに解つては居はしないかなどと思ふと、質問をすることが、良澤の前で、自分の無智を告白して居るやうで、何うにも氣が進まなかつた。玄白は、さうした外聞とか見得とか云つたやうな心持を、心の裡で可なり恥ぢて居た。が、恥ぢながらも、それに拘泥らずには居られなかつた。彼は、阿蘭陀の事物、學術殊に醫術に對する智識慾に渴えながら、妙な意地から、心のまゝに、質問することが出來なかつた。

その日も、彼は皆が來ない前、特に良澤の來ない前に、自分一人で、善三郎に會ひたかつたのである。彼は阿蘭陀文字を讀まうと云ふ自分の豫てからの宿願を述べて、その志願の可能不可能を、善三郎に質して見たかつたのである。

そのために、昨日よりは半刻も早く來た玄白には、良澤が自分よりも早く來て居た

ことが、可なりの打擊だつた。

が、彼は良澤に介意ひすぎる自分の心持を恥ぢた。彼は、良澤たゞ一人しか居ないのを幸ひに、自分の素志を述べて見た。

「西氏！　今日は、ちと御邊に折入つてお訊ねしようと思ふことが御座るのぢや、それは餘の儀では御座らぬ。總體、阿蘭陀の文字と申すものは、われら異國の者にも、讀めるもので御座らうか。それとも、いかほど刻苦いたしても讀めないもので御座らうか。有樣にお答へ下されい。われら存ずる仔細も御座るほどに。」

玄白の問には、眞摯な氣が、充ちて居た。西は玄白の熱心を嘉みするやうに、二三度肯いた。が、彼の與へた答は否定的だつた。彼は、西海の人に特有な快活な調子で答へた。

「さればさ。それは、三四の方々からも訊ねられた事で御座る。なれど、われら答へ申すには、たゞ御無用になされと申す外は御座らぬ。いかほど、辛勞なされても、所

詮及ばぬことで御座る。有様を申せば、われら通辭の者にても、阿蘭陀の文字を心得居るものは、われら一兩人の外は、とんと御座らぬ。餘の者は、音ばかりを假名で書き留め、口づから記憶じ申して、折々の御用を辨じ居るので御座る。彼の國の言葉を、一々に理會いたさうなどは、われら異國人には、所詮及ばぬことで御座る。例へて申さうなら、彼の國の加比丹又はマダロスなどに、湯水又は酒を呑むを何と申すかと、訊ね申すには、最初は手眞似にて問ふ外は、御座らぬ。茶碗などを持ち添へ、注ぐ眞似を致し、口に付けて、これはと問へば、デリンキと敎へ申す。デリンキは、呑むこと、承知いたす。茲までは、仔細は御座らぬ。なれど、今一足進み申して、上戸と下戸との區別を、問はうには、ハタと當惑いたし申す。手眞似にて問ふべき仕方は御座らぬ。屢々、呑む眞似をいたして、上戸の態を示し申しても、相手にはとんと通じ申さぬ。さればちや、多く呑みても、酒を好まざる人あり、少く呑みても好む人あり、形丈にては上戸下戸の區別は、とんと付き申さぬ。かやうに、情の上のことは、いか

やうに手眞似を盡くしても、問ふべき仕方は御座らぬ。」

「なるほどな。御尤もで御座る。」

玄白も、相手の返事の道理を、肯かずには居られなかつた。

玄白が、首肯するのを見ると、西はやゝ得意に語りつゞけた。

「阿蘭陀の言葉の、むつかしき例には、かやうな事も御座る。アーンテレッケンと申す言葉が御座る。好き嗜むと云ふ言葉で御座るが、われら、通辭の家に生れ、幼少の折より、この言葉を覺え、幾度となく使ひ申したが、その言葉の意は、一向悟り申さなんだところ、年五十に及んで、此度の道中にて、やつと會得いたして御座る。アーンは、元と云ふ意で御座る。テレッケンとは、引くと云ふ意で御座る。アーンテレッケンとは、向ふのものを手元へ、引きたいと思ふ意で御座る。酒を好むとは、酒を手元へ引きたいと云ふ意で御座る。故郷をアーンテレッケンするとは、故郷を手元へ引き寄せたいほど、懷しむと云ふ意で御座る。斯樣に、一つの言葉にても、むつかしき

ものに御座れば、われらの如き、幼少より阿蘭陀人に朝夕いたし居る者にても、なかなか會得いたし兼て御座る。況んや、江戸などに御座しては、所詮叶はぬことで御座る。御存じても御座らう。野呂玄丈殿、青木文藏殿など、御用にて、年々當旅宿へ、お越しなされ、一方ならず御出精なされても、はかばかしう御合點も參らぬやうで御座る。其許も、さ樣な思召立は、必ず御無用になされた方が、よろしからう。」

西は、自分自身も、とつくに諦め切つて居るやうに云つた。

「なるほど。道理で御座る。」

玄白も、さう答へる外はなかつた。相手が切に止めるものを、強いて學習の方法などを訊く譯にも行かなかつた。

「なるほど。大通辭の御邊が、左樣に思ふて居らるゝことを、われらが如何やうに思ひ立つても、及ばぬことで御座る。所詮は、思ひ切る外は御座らぬ。」

玄白が、何氣なくさう云つた時だつた。今まで默つて、西と玄白との問答を聽いて居

た良澤が、急に口を挾んだ。

「いや、御兩所のお言葉では御座るが、われらの存ずる仔細は別ぢや。凡そ、紅毛人とは申せ、同じ人間の作つた文字書籍が、同じ人間に會得出來ぬと云ふ道理は、更々御座らぬわ。われらが、平生讀み書きいたし居る漢字漢語も、又われら士大夫が、實踐いたし居る孔孟の敎も、傳來の初には、只今の阿蘭陀の文字同樣一切不通のものであつたに相違御座らぬわ。それを、われらの遠つ祖ども(おや)が、刻苦いたして、一語半語づゝ理會いたして參つたに相違御座らぬ。遠つ祖どもの苦心があればこそ、二千年この方、幾百億の人々が、その餘澤に濕ふて御座るのぢや。良澤の志は、其處て御座る。われらは、此後に來る者のためには、彫心鏤骨の苦しみも、忌ひ申(いと)さぬ覺悟で御座る。杉田氏も、お志をお捨てなされいて、お始めなされい。われらは、今年四十九で御座るが、倒れるまで、努めて見る積で御座る。」

玄白は、良澤の志を聽いて心から、耻ぢずには居られなかつた。その雄渾な志を聽

いて、心から耻ぢずには居られなかつた。彼は、之れを自分に對する有難い忠言だと思はずには居られなかつた。が、彼は餘りに觸れられたくない急所に、相手が唐突に觸れて來たことに、可なりな不快を感ぜずには居られなかつた。此方が、半分は挨拶旁々、云つて居ることに、何の容捨もなく、眞劍に向つて來た相手に、ある不快を感ぜずには居られなかつたのである。

二

玄白が、蘭書ターヘルアナトミアを手に入れたのは、それから五日とは經たない頃だつた。

玄白の志は、元來阿蘭陀流の醫術に在つた。彼が蘭語を學びたく思つたのも、それに依つて療術方藥に關する蘭書を讀破したい爲てあつた。

從つて、彼はターヘルアナトミアを、ある内通辭から示されると、彼は驚喜の眼を刮らずには居られなかつた。濃い赤と青とで、彩られた臟腑骨節の、精緻な繪畫を見ると、彼は其處に人體に就いての凡ての秘奥が、解き明されてあるやうに思はれた。その繪畫と繪圖との間に走しつて居る、模樣の樣な阿蘭陀の文字は、一字も半字も、讀めなかつたけれども、彼の心は烈しい好奇と感激とに充たされずには居なかつた。

彼は、心の底からそれに垂涎した。價は、二十五人扶持の彼に取つては、力に餘る三兩と云ふ大金だつた。が、彼は前後の思慮もなかつた。懷中して居た一朱銀を、手金として、その通辭に渡すと、彼は金策のために、藩邸へ走せ歸つた。

彼が、馳け付けて行つたのは、家老岡新左衞門の邸であつた。岡は、豫てから玄白に好意を持つて居た。彼は玄白の懇願を聽くと、

「それは求めて置いて、用立つものか。用立つものならば、價は上より下し置かれるやう、取計つて得させやう。」と、云つた。

さう答へられると、玄白も感奮した。

「されば、必ずかうと云ふ目當は御座りませねども、是非とも用立つものにして、お目に掛けるで御座らう。」と、誓はずには居られなかつた。

丁度、座に小倉左衞門と云ふ男が、居合はした。

「それは、何卒調へて遣はされたい。杉田氏はそれを空しくする人では御座るまい。」と、助言して呉れた。

ターヘルアナトミアを、自分のものにした玄白は、雀躍して欣んだ。

三

三月三日の事であつた。玄白は、その日も長崎屋へ出向いて居た。將軍家の阿蘭陀人御覽が、昨日滯りなく終つたので、加比丹を初、二人の書記役（シキリイバ）、大小の通辭達も、

みなのび〳〵とした氣持になつて居たので、會談が何時になく賑つた。到頭、おしまひに加比丹が、珍酡と云ふ珍らしい酒を出して、皆を饗應つた。

その日は、良澤の顏が見えない外、一座の者は、中川淳庵、小杉玄適、嶺春泰、鳥山松圓など、皆醫師ばかりであつたので、對話は多岐に彌らずして、緊張して居た。殊に、書記役（シキリイバ）の一人のバブルは、外科の巧者であつたので、皆はバブルを圍んで、貪るやうに、いろ〳〵な質問を發して居た。

殊に、嶺春泰は、刺絡の術を、熱心に訊いて居た。

春の永い日が暮れて、阿蘭陀人達が、食事のために、退いたとき、皆は緊張した對話から、ホツとして我に歸つて居た。彼等が、急いで歸り支度にかゝつて居る時だつた。中川淳庵の私宅から、小者が赤紙の附いた文箱を持つて、馳け付けて來た。

淳庵は、その至急を示した文箱を、一寸不安な顏付で、取り上げたが、中の書狀を讀んで居る裡に、彼の不安な顏は、欣びて崩れてしまつた。

「諸君！　お欣びなされい！　かねての宿願が、叶ひ申したぞ。明日、骨ヶ原で腑分がある！　腑分がある！」

彼は、喜悅の聲を揚げながら、一座の者にその書狀を差し示した。それは、いかにも町奉行曲淵甲斐守の家士得能萬兵衞から、明四日千住骨ヶ原にて、手醫師何某が、腑分をすることを、內報して來た書狀だつた。

「腑分が！　腑分が！」

皆は、口々に欣びの聲を出した。

淳庵、玄適、玄白など、阿蘭陀流の醫術に志すものに取つては、觀臟は年來の宿願だつた。が、その機會は容易に得られなかつたのだ。

殊に、彼等は今日此頃、バブルから、身體內景の有樣を、新しく聞いて居たので、腑分に對する宿望は、更に油を注がれたやうに、燃えて居た。

殊に、玄白は腑分と聽くと、自分の心が、飛揚するのを抑へることが、出來なかつ

た。彼は、ターヘルアナトミアを手にして以來、腑分の日を、一日千秋の思で待つて居た。彼は、ターヘルアナトミアの繪圖が、古人の諸說と悉く違つて居るのを知つて居た。彼は、それを實地に照して、一日も早く確めたかつたのである。

一座の人々の顏は、欣びに輝いて居た。

「それでは、今夜は直ちに歸宅して休息いたし、明日早天に、山谷町出口の茶屋で待ち合はすことにいたさう。」

淳庵は、座中を見廻して云つた。一座は、直ぐそれに同意した。

その時に、玄白の頭の中に、ふと良澤の顏が浮んだ。彼は、良澤がやはり、觀臟の希望の切なことを知つて居た。一座の誰にも、劣らないほど、切なのを知つて居た。縱令、良澤が、この席に居合はさずとも、明日の一擧に洩すべき人でないことを、感じて居た。

が、彼は良澤の名を、氣輕に口にすることが出來なかつた。良澤に對する輕い反感

のために、たやすく口にする事が出來なかつた。その上、彼の心の一隅には、日頃一座に對して高飛車な、見下したやうな態度を取つて居る良澤が、大切な企に洩れることを、いゝ見せしめだと思ふ心が、かすかではあるが動いて居た。

それに、誰もが良澤のことに、氣が付いて居ない以上、自分が特に注意するにも、當らないと思つて居た。

が、一座がその儘に、立ち上りさうになると、玄白の心は、だん〳〵苦しくなつて居た。輕い苛責が彼の心を鞭打つた。彼は、良澤に對する自分の態度の卑しさに、氣づかずには居られなかつた。

彼は、到頭默つては居られなかつた。

「前野氏が居る！　前野氏が居る！　前野氏へも、何とかいたして知らせたいものでご座る。」

さう云つたとき、玄白は自分自身、救はれたやうな明るい氣持になつた。

「おゝ前野氏が居る！　前野氏の事を、とんと失念致して居た。前野氏へは、是非一報いたさいで叶はぬ事ぢや。」

玄適が、直ぐそれに應じた。が、他の者は餘り、氣が乘つて居るやうでもなかつた。淳庵は、云ひ譯のやうに云つた。

「前野氏にも、知らせたうは御座るが、前野氏の麹町の住居までは、餘程の道程で御座る。もう、初更も過ぎて居るほどに、知らすべき便は御座らぬ。前野氏には、また此次の機も御座らう。」

玄白は、もう默つて居ようかと思つた。自分の心持丈は、これで濟んで居る。前野を、是非とも、明日の企に與らせねばならぬほどの、義理も責任もないと思つて居たが、彼は自分の心の底に、良澤の來ないことを、欣ぶやうな心が、潜んで居ることに氣付いて居る丈に、そのまゝ默つて居るのが、疚しかつた。

「いや、知らすべき便がないとは、限り申さぬ。本石町の木戸際には、定めし辻籠が

居ることで御座らう。手紙を調へ、辻籠の者に置捨に致さすれば、念がとゞかぬことは御座るまい。」

玄白の考は、時に取つての名案だつた。

「それは、天晴のお心付きぢや。」

一座の者は、皆それに賛成した。玄適が、直ぐ手紙を書きにかゝつた。

玄白は、自分で良澤を呼びながら、一方それを悔いて居るやうな心持が、動いて居ないこともなかつた。が、ふと自分の持つて居るターヘルアナトミアのことを考へると、また別な心持が動いた。彼は、その珍書を、皆の前で、披露するときの、得意な心持を考へた。殊に、良澤の前で——いつも、それとなく威壓されて居るやうに思ふ良澤の前で、ターヘルアナトミアを開いて見せる自分の心持を考へて見た。

彼は、やつぱり良澤を呼んで、いゝ事をしたと思つた。

四

三月四日の朝、玄白は寅の二つに近い頃、新大橋の藩邸を出て、淺草橋から藏前を通つて、廣小路に出て、馬道から山谷町の出口の茶屋に着いたのは、春の引き明けの薄紫の空に、淺草寺の明六つの鐘が、かう〳〵と鳴り渡つて居る頃であつた。

茶屋の座敷に上つて見ると、もう玄適と良澤とが、朝寒の部屋に、火鉢を圍ひながら向ひ合つて居た。

麹町平河町に住んで居る良澤が、自分より先きへ來て居るのを見ると、玄白は心中少からず、駭かずには居られなかつた。

良澤は、玄白が入つて來るのを見ると、何時になく丁寧に會釋した。

「杉田氏！　昨夜は、貴所の肝煎で、使を下さつたさうで、有難く存じ居る。お陰で、

拙者も斯樣な、會ひがたき企に與り申して、大慶に存じ居る所で御座る」

さう、眞正面から感謝されると、玄白は自分の今迄の、良澤に對する心持を、心の裡でやゝ恥しく思はずには居られなかつた。

玄適が、横から口を挾んだ。

「杉田氏！。前野氏は、昨夜から、一睡もなされないさうで御座る。使の者が參つたのが、子に近い頃で、お宅を出られたのが、丑二つ頃ぢやと申す。その間も、今日の企てのことを思はれると、心が躍るやうで、一睡もなされなんださうで御座る」

玄白は、良澤の執心が、自分以上に、烈しいことを知ると、どんな點でも、良澤には及ばないと云つたやうな、寂びしさを感ぜずには居られなかつた。

が、さうした寂びしさも、自分が懷中して居るターヘルアナトミアのことを、考へると、直ぐ慰められた、今日の參會に、此の珍書を持つて居る者は、自分一人だと思ふと、良澤に對するさうした寂びしさも直ぐ消えてしまつた。

その裡に淳庵が見えた、小半刻ばかり經つた頃に、春泰と良圓とが、連れ立つてやつて來た。六人の顏が揃ふと、打ち連れ立つて骨ヶ原に向つた。

春の早朝の微風に顏を吹かせながら、六人は興奮してよく喋べつた。六人とも、中年を越した者ばかりであつたけれども、彼等の心持は、期待のために、躍つて居た。六人の步調が、何時の間にか、早くなつて居た。小男の淳庵が、ともすれば、遲れ勝であつた。

玄白は、いつターヘルアナトミアを、取り出して、皆に披露しようかと思つて居た。彼は、先刻山谷町の茶屋で、披露しようと思ひながら、つひその時機を得なかつた。

骨ヶ原の刑場に近づくと、街道に面した梟木の上に、刑死して間もないやうな老婆の首が、かけられて居た。その胴體が、今日腑分けせられるのだと氣が付くと、六人は一寸不快な感じを懷かずには居られなかつた。

非人頭が、六人を刑場の入口にある與力詰所へ案内した。腑分けの準備が、整ふま

で六人は其處で、待たなければならぬのだつた。

玄白は、今こそと思ひながら、懷中のターヘルアナトミアに手をかけようとした。が、それと同時に、良澤が思ひ出したやうに、右の手に持つて居た風呂敷包みを、解きながら云つた。

「左様！左様！各々方に、御披露するものが、御座つた。先年長崎へ參つた折、求め歸つて家藏いたし居る、阿蘭陀解剖の書で御座るが」

さう云ひながら、彼は風呂敷包みの中から、取り出した一本を、皆の前に指し示した。

玄適が、好奇の眼を輝かしながら、それを受取つた。五人の眼が、一齊にそれに注がれた。が、玄白は一目見ると、自分の眼を疑はずには居られなかつた。それは、自分が懷中して居る、ターヘルアナトミアと、寸分違はぬ同版同刻の書であつた。

彼は、茫然として語がなかつた。良澤に對して、主張し得ると思つて居た彼が、最後の據りどころは、脆くも蹂み躙られてしまつたのであつた。が、玄白は、懷中して

居る自分の本を出さない譯にも行かなかつた。

「前野氏は、豫てから御所持で御座つたか。實は、拙者もこのほど、一本を求め申して御座る」

玄白は何氣ないやうに、披露した。が、彼が昨夜から、樂しみにして居た披露する折の得意さ、晴がましさなどは微塵も感じられなかつた。菲を嚙むやうな氣持であつた。

が、良澤は、それを見ると、心から駭いたらしかつた。彼は玄白の差し出した本を取り上げながら、表紙や扉を打ち返して見た。

「これは紛ぎれもなく同本ぢや。不思議な奇遇で御座る。奇遇で御座る」

さう云ひながら、良澤は幾度も手を拍つた。良澤の態度は、天空の如く開濶だつた。

「貴所と、某とが期せずして、ターヘルアナトミアを所持いたし居るなど、これは阿蘭陀醫術が、開くべき吉瑞とも申すべきで御座る」

良澤は、さう語をつゞけて哄笑した。彼は、書中の一圖を玄白に指し示しながら云つた。

「御覽なされい！　これが、ロングと申し肺で御座る。これがハルトと申し心で御座る。これはマーグと申し胃で御座る。これは、ミルトと申し脾で御座る。醫經に申す、五臟六腑、肺の六葉、兩耳肝の左三葉、右四葉などの說とは、似ても似ぬことで御座る。今日こそ、漢說が正しいか、阿蘭陀の繪圖が正しいか、試すべき時期で御座る」

良澤の顏は、究理に對する興奮で輝いて居た。玄白も、良澤の高朗な熱烈な氣持に接して居ると、自分の心の裡の妙なこだはりなどは、何時の間にか忘れて居た。

五

やがて、六人は打ち連れて、觀臟の場所へ行つた。

刑場の一部に、蓆を以て、粗末な假小屋が、設けられて居た。手醫師の何某が、三人の穢多と、二人の與力と一緒に待つて居た。

屍體は案の如く、首丈は梟木の上に、かけられて居る老婆のそれであつた。老婆は青茶婆と云つて、幾人となく貫ひ子を殺した大罪の女であつた。若い時、艶名を歌はれたと云はれる丈に、五十を越して居ると云ふにも拘はらず、白い肥肉の身體には、まだ少しの皺も見えなかつた。

刀を執る者は、虎松と云ふ九十に近い穢多だつた。刑死人の屍體の脂肪が、にじみ出て居るのではあるまいかと思はれるやうな、赤黑い皮膚をした健やかな老人であつた。

彼は、若い時から、腑分けは幾度も手にかけ、數人を解いたことがあると自慢とした。

究理のために、勇み立つて居る六人ではあつたけれども、その首のない、生白い無

恰好な屍體を見たときに、皆は思はず、顔を背けずには居られなかつた。眼や鼻から受ける醜惡な感じて、六人の胸は閉された。が、良澤も淳庵も、玄白も、必死な色を浮べて、さうした感じに堪へて居た。

老人の穢多は、磨ぎすました出刄を、逆手に持つと、獸の肉をでも剖くやうに、屍體の胸を、つぶ〳〵と切り開いて行つた。まだ首が離れてから、半刻と經つて居ない屍體からは、出刄の切先の進むに連れて、かたまりかけて居る血が、とろ〳〵と浸じみ出た。

胸が、第一に切り割かれた。良澤も玄白も、ターヘルアナトミアの胸の繪圖を開きながら、眞赤に開かれて行く屍體の胸と、一心に見比べてゐた。

それが、良澤と玄白とに取つて、何と云ふ不思議であつたらう。出刄の切先に切られて行く骨の一つも、筋の一つも、肉の間に網の如く走しつて居る白い奇怪な線條も、白く浮き上つて居る脂肪も、びろ〳〵と胸廓一杯に、氣味惡く擴がつて居る肺も、左

肺の下から窺いて居る、眞赤な桃の實の如き心の臟も、ターヘルアナトミアの繪圖と、一分一點の違もなかつた。

良澤も玄白も、他の四人も深い感嘆のために、聲も出なかつた。

續いて、腹が剖かれた。そこに見出された胃、奇怪な形に蹲踞つて居る腸、腸胃の陰にかくれた名も知らぬ臟腑まで阿蘭陀圖と、寸分の違もなかつた。

老屠が、出刄を持つ手を止めると、良澤は初て、我に歸つたやうに叫んだ。

「至極ぢや。至極ぢや。蘭書の繪圖と、寸分の違も御座らぬ。和漢千載の諸說は、みな取るに足らぬ妄說と、定まり申した。醫術はもはや阿蘭陀に止めを刺し申した」

「至極ぢや。至極ぢや！」

皆は、良澤の感激に聲を合はせた。

刑場からの歸途、春泰と良圓とは、一足遲れたゝめ、良澤と玄適と淳庵、玄白の四

人連であつた。四人は、同じ感激に浸つて居た。それは、玄妙不思議な阿蘭陀の醫術に對する讃嘆の心であつた。

刑場から、六七町の間、皆は默々として銘々自分自身の感激に浸つて居たが、淺草田圃に差しかゝると、淳庵が感に堪へたやうに云つた。

「今日の實驗、たゞ〳〵驚き入るの外はないことで御座る。かほどの事を、これまで心付かずに、打ち過したかと思へば、此上もなき恥辱に存ずる。われ〳〵醫を以て、主君々々に仕へるものが、その術の基本とも申すべき、人體の眞形をも心得ず、今日まで一日一日と、その業を務め申したかと思へば、面目もないことで御座る。何とぞ、今日の實驗に基づき、大凡にも身體の眞理を辨へて、醫をいたせば、醫を以て天地間に身を立つる申譯にもなることで御座る」

良澤も玄白も淳庵も、玄適の述懷に同感せずには居られなかつた。玄白は、その後を承けて云つた。

「いかにも、尤もの仰せぢや。それに付けても拙者は、如何にも致して、このターヘルアナトミアの一卷を、翻譯いたしたいものぢやと存ずる。これだに、翻譯いたし申せば、身體內外のこと、分明を得て、今日以後療治の上にも、大益あることゝ存ずる。」

良澤も、心から打ち解けて居た。

「いや、杉田氏の仰せ、尤もで御座る。實は、拙者も年來蘭書讀みたき宿願で御座つたが、志を同うする良友もなく、慨き思ふのみにて、日を過して御座る。もし、各々方が、志を合はせ下されば、何よりの幸ひぢや。幸ひ、先年長崎留學の砌、蘭語少々は記憶いたして御座るほどに、それを種と致し、共々此のターヘルアナトミアを、讀みかゝらうでは御座らぬか」と、云つた。

玄白も、淳庵も、玄適も、手を拍つてそれに同じた。彼等は、異常な感激で結び合はされた。

「然らば、善はいそげと申す。明日より拙宅へお越しなされい！」

良澤は、その巨きい眼を輝しながら云つた。

六

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に、月五六回づゝ相會した。良澤を除いた三人は、阿蘭陀文字の二十五字さへ、最初は定かには覺えて居なかつた。

良澤は、三人の人々に、蘭語の手ほどきをした。彼は、遉に長崎へ留學したことがある丈に、多少の蘭語と、章句語脈のことも、少しは心得て居たけれども、それも殆ど云ふに足りなかつた。一月ばかり經つと、良澤が三人に敎へることは、もう何も殘つて居なかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は初て、ターヘルアナトミアの書に向つた。

が、開卷第一の頁から、たゞ茫洋として、艫舵なき船の大洋に乘出せしが如く、何處から手の付けやうもなく、あきれにあきれて居る外はなかつた。

が、二三枚めくつた所に、仰けに伏した人體全象の圖があつた。彼等は考へた。人體內景のことは知りがたいが、表部外象のことは、その名所も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と說の中の符號とを、合せ考へることが一番取付き易いことだと思つた。

彼等は、眉、口、脣、耳、腹、股、踵などに附いて居る符號を、文章の中に探した。そして、眉、口、脣などの言葉を、一つ一つ覺えて行つた。

が、さうした單語丈は、分つても前後の文句は、彼等の乏しい力で、一向に解し兼た。一句一章を、春の長き一日、考へあかしても、彷彿として明らめられないことが屢々あつた。四人が、二日の間、考へぬいて、やつと解いたのは「眉トハ目ノ上ニ生ジタル毛ナリ」と云ふ一句だつたりした。四人は、そのたわいもない文句に哄笑しな

からも、銘々嬉し涙が眼の裡に、浸(にじ)んで來るのを感ぜずには居られなかつた。

眉から目と下つて、鼻の所へ來たときに、四人は、鼻とはフルヘッヘンドせしものなりと云ふ一句に、突き當つてしまつて居た。

無論、完全な辭書はなかつた。たゞ、良澤が、長崎から持ち歸つた小冊に、フルヘッヘンドの譯註があつた。それは、「木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土聚りて、フルヘッヘンドをなす」と云ふ文句だつた。

四人は、その譯註を、引き合はしても、容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド！　フルヘッヘンド！」

四人は、折々その言葉を、口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合せたまゝ、一語も交へずに考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。

「解せ申した。解せ申した。方々、斯樣で御座る。木の枝を斷り申したる迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、これも堆くなるで御座らう。されば、鼻は面中に在りて、堆起するもので御座れば、フルヘッヘンドは、堆しと云ふことで御座らうぞ」と云つた。

四人は、手を拍つて欣びあつた。玄白の眼には涙が光つた。彼の欣びは、連城の玉を、獲るよりも勝つて居た。

が、神經(シンネン)などゝ云ふ言葉に至つては、一月考へ續けても解らなかつた。

彼等は、最初難解の言葉に接するごとに、丸に十文字を引いて印とした。それを、轡十文字と呼んで居た。初一年の間、どの頁にもどの頁にも、轡十文字が、無數に散在した。

が、彼等の先驅者としての勇猛精進は、凡てを、征服せずには居なかつた。一ヶ月六七會の定日を、怠りなく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も、明かに、書中の轡十文字は、殘少くかき消されて居た。

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみが知る欣びで酬はれて居た。語句の末が明になるに從つて、次第に蔗を嚙ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が彼等の心に浸み付いて居た。

彼等は、邦人未到の學問の沃土に、彼等のみ足を踏み入れ得る欣びで、會集の期日毎に、兒女子の祭見に行く心地にて、夜の明くるのを待ち兼ねるほどになつて居た。

七

玄白が、最初良澤に對して懷いて居た輕い反感などは、もう迹形もなかつた。彼は良澤の爲人とその篤學に、心からなる尊敬を拂つて居た。

が、翻譯の業が、進んで行くのに從つて、玄白はだん〳〵自分の志と、良澤のそれとが、離れて居るのに氣が付いた。

玄白の志は、ターヘルアナトミアを、一日も早く飜譯して、治療の實用に立て、世の醫家の發明の種にすることだつた。彼は、心の裡に思つて居た。漢學が、日本へ傳來して大成するまでには、數代數十代の努力を要して居る。それと同じやうに、蘭學の大成も、數代を要するに違ないと思つて居た。彼は、さうした一代に期しがたい大業を志すよりも、一事一書に志を集めて、一代に成就することを期するに加かじと思つて居た。五色の絲の亂れしは、美しけれども、實用に供するには、赤とか黃とかの一色に決し、他は皆切り棄つるに如かずと思つて居た。

從つて、彼はターヘルアナトミアの飜譯に、餘念もなかつた。彼は、一日會して、解し得たところは、家に歸つて、直ちに飜譯した。

が、良澤の志は、遠大だつた。彼の志は、蘭學の大成に在つた。ターヘルアナトミアの如きは、殆ど眼中になかつた。彼は、阿蘭陀語の悉くに、通達し、彼の書籍何にても讀破したい大望を懷いて居た。

最初、一二年は、良澤と玄白との間に、何等意見の扞格もなかつた。が、彼等の力が進むに從つて、二人はいつも同じやうな口爭ひを續けて居た。

「此の所の文意はよく解り申した。いざ先きへ進まうでは御座らぬか」

玄白は、常に先きを急いで居た。が、良澤は、悠揚として落着いて居た。

「いや。お待さなされい。文意は通じても、語義が通じ申さぬ。凡そ、語義が通じ申さいて、文意のみが通ずるは、當推量と申すもので御座る。」

良澤は、頑として動かなかつた。

八

四年の月日は過ぎた。

玄白は、ターヘルアナトミアの稿を變へること、十二回に及んだ。が、篇中、未解

の場所五ヶ所、難解　場所十七ヶ所あつた。玄白は、只管に上梓を急いだ。が、良澤は、未解難解の場所を、解するまではとて、上梓を肯んじなかつた。

良澤と玄白とは、それに就て幾度も論じ合つた。が、二人は幾何論じあつても、一致點を見出さなかつた。それは、二人の蘭學に對する態度の根本的な相違だつた。

玄白は、到頭自分一人の名前で、ターヘルアナトミアの飜譯たる解體新書を上梓する決心をした。

が、遂に彼は良澤の名を無視する譯には行かなかつた。飜譯の筆記こそ、玄白の手に依つて行はれたものゝ、飜譯の功は、半良澤に歸すべきものだつたから。

玄白は、良澤を訪ふて序文を懇願した。が、良澤は序文をも、次ぎのやうに云つて斷つた。

「いや、拙者曾て、九州を遊歷いたした折、太宰府の天滿宮へ參詣いたした節、斯樣に申して、起誓したことが御座る。良澤が、蘭學に志を立て申したは、眞の道理を究

めよう爲で、名聞利益の爲では、御座らぬゆゑ、この學問の成就するやう冥護を垂れたまへと、斯樣に祈り申したのぢや。この誓ひにも、背き申すゆゑ、序文の儀は平に、許させられい！」

それを、聽いた玄白は、寂しかつた。が、彼は自分の態度を卑下する氣には、少しもなれなかつた。彼は、良澤の態度を、尊敬した。が、それと同時に、彼は自分の態度を肯定せずには居られなかつた。

彼は、晩年蘭學興隆の世に會つた時の手記に、自分の態度を、次ぎのやうに主張した。

「翁は、元來疎漫にして不學なるゆゑ、可成りに蘭說を飜譯しても、人のはやく理會し、曉解するの益あるやうになすべき力はなく、されども人に托しては、我本意も通じがたく、やむことなく拙陋を顧みずして、自ら書き綴れり。其中に精密の微義もあるべしと思へるところも、解しがたきところは强ひて解せず、たゞ意の達したるところを、擧げ置けるのみ。譬へば、京へ上らんと思ふには、東海東山二道あるを知り、西へ〳〵と行けば、終には京へ上り付くと云ふ所を、第一とすべし。その道筋を敎へる迄なりと思へば、その荒增を唱へ出せしなり。首めて唱る時に當りては、なか〳〵後の譏りを恐るゝやうなる、碌々たる了簡にて企事は出來ぬものなり。くれ〳〵も大體に本づき、合點の行くところを譯せし迄なり。梵譯の四十二章經も、漸く今の一切經に及べり。之が、翁が、その頃よりの宿志にして企望せし所なり。世に良澤と云ふ人なくば此道開くべからず。されど翁の如き、素意大略の人なければ、此道かく速かに開くべからず、是もまた天助なるべし」——（完）——

亂

世

一

戊辰正月、鳥羽伏見の戰で、幕軍が敗れたと云ふ報知が、初めて桑名藩に達したのは、今日限りで、松飾りが取れようと云ふ、七日の午後であつた。

同心の宇多熊太郎と云ふ男が、戰場から道を迷つて、笠置を越え、伊賀街道を、故郷へと、走せ歸つて來たのである。

一藩は、愕然とした。愕然としながらも、みんな爪先立てゝ、後の報知を待つて居た。

公用方の築麻市左衛門が、歸つて來たのは、十日の午前であつた。彼は、本國への使者として、浪花表で本隊と離れ、大和伊賀を、さ迷つた末、故郷へ辿り付いたのである。從つて、彼は敗戰に就いて、もつと精しい報知を持つて居た。慶喜公が、藩主越中守、會津侯、その他僅か數名の近侍のものと、夜中潛かに、軍艦に投じて、逃がるゝやうに江戸に下つたこと、幕軍を初、會桑、二藩の諸隊は、算を亂して、紀州路に落ちて行つたこと、朝廷では討幕の軍を早くも發向せしめようとして居る事などが彼に依つて傳へられた。

一藩は、色を失つた。薩長の大軍が、錦の御旗を押し立てゝ、今にも東海道を下つて來ると云つたやうな風聞が、頻りなしに人心を動かした。

桑名は、東海道の要衝である。東征の軍に取つては、第一の目標であつた。その上、元治元年の四月に、藩主越中守が、京都所司代に任ぜられて以來、薩長二藩とは、互に恨みを結び合つて居る。薩長の浪士達を迫害して居る。殊に、長州とは蛤門の變以

來、恨が更に深い。彼等は、桑名が朝敵になつた今、錦旗を擁して、どんなヒドい仕返しをするかも分らない。

藩中が、鼎の湧くやうに、沸騰するのも、無理もなかつた。藩主も留守であつて、一藩の人心を統一する中心がない。その上、多くの家庭では、思慮分別のある屈竟の人達は、藩主に從ふて上京して居る。紀州路へ落ちたと云ふ噂丈で、今は何處を漂浪つて居るか分らない。留守を守つて居る人々は、老人でなければ、女子供である。さうした家庭では、狼狽して爲す所を知らないのも當然である、

市左衛門が、歸つて來たその夜、城中の大廣間で、一藩の態度を決するための、大評定が開かれた。

血氣の若武者は、桑名城を死守して、官軍と血戰することを主張した。が、それが無謀な、不可能な、たゞ快を一時に遣る方法であることは、誰にも分つて居た。隣藩の龜山も、津の藤堂も、勤王である。官軍を前にしては、脊後にしなければならぬ尾

州藩は、藩主同志こそ兄弟であるが、前年來朝廷に忠誠を表して居る。何等の後立もなく、留守居の小勢で、血戰したところで、一揉みに揉み潰されるのは、定まつて居る。

死守說は、少數で直ぐ破れた。その後で、議論は東下論と恭順論との二つに別れた。東下論は、硬論であり、恭順論は、軟論であつた。

家老の酒井孫八郎や、軍事奉行、杉山弘枝は、東下論を主張した。彼等の主張はかうであつた。城を守つて一戰することは、花々しいことではあるが、此の小勢では一日も支へがたい。が、それかと云つて、藩主定敬公が、まだ恭順を表されない前に、城を出でゝ官軍に降ると云ふことは、相傳の主君に對して不忠である。從つて、我々の採る道は、今の場合一つしかない。それは、城を一旦敵に渡して、關東に下り、藩主越中守の指揮に從ひ、幕軍と協力して、敵に當るより外はないと云ふのだつた。

それに對して、政治奉行の小森九右衞門、山本主馬などが、恭順論を主張した。彼等は、天下の大勢を說き、順逆の名分を力說して、此際一日も早く、朝威に歸順するのが得策であると云ふのであつた。

恭順東下の議論は、二日に亙つて決しなかつた。その裡に、鎭撫使の橋本少將、柳原侍從が、有栖川宮の先發として、京師を發したと云ふ報知が、早くも傳つた。

その報知に接して、評定の人々は、更に焦つた。が、諸士の議論は、容易に一致しなかつた。藩中第一の器量人と云はれて居る家老の、酒井孫八郎が、到頭こんなことを云ひ出した。今、敵は眼前に迫つて居る。必死危急の場合である。小田原評定をやて、一刻をも緩ふすべき時ではない。昨日今日の容子では、この上幾何評定を重ねても、皆が心から折れ合ふことなどは望み得ない。その上、恭順がよいか東下がよいか、その孰れが本當に正しいかは、人間の力では判るものではない。それよりも、いつそ、東下と恭順との二つの籤を作つて、藩主定綱公以下を祭つた神廟の前で引いて見よう。その出た籤に依つて、一藩の態度を、決しようではないかと、云ふのであつた。

議論に疲れて居た――また心　裡では、歸趣に迷ふて居た――多くの藩士達は、擧つてその說に贊成した。

かうして、籤は作られた。發案者の酒井が、撰ばれて、籤を引いた。引かれた籤は東下の籤であつた。東下の籤が出た以上、恭順論者も、諦めてそれに從ふ外はなかつた。

藩老達は、一藩の士卒を城中に呼び集めて、評定の經過を語つた後、關東へ發足するに就いての用意を命じた。命ぜられた藩士達は、家財を取り片づけ、妻子を緣故緣故を辿つて、城下の町人在の百姓に預けるなど、一藩は激しい混亂に陷つた。

が、其處に思はざる反對が起つた。それは、お目見得以下の輕輩の士が、一致してのこひ分であつた。彼等は、太平の世には、上士達の命令を唯々諾々として、聽いて居た。が、一藩が危急に瀕すると、其處に階級の區別は、段々薄れて居た。階級が物を云はずして數が物を云ふのであつた。三百名に近い下士達は、足輕組頭矢田半左衞門、松岡領右衞門、大塚九兵衞を筆頭として、東下論に、反對した。彼等の云ひ分は

可なり筋道が通つて居た。

關東へ下ると云ふことは、將軍家及び藩主定敬公と協力して、官軍に當ると云ふのであるが、然し將軍家が、必ず官軍に反抗するとは定まつて居ない。否、將軍家も定敬公も、錦旗の旗影を見られると、直ぐ恭順せられるかも知れない。もし、さうした場合には、我々が捨てぬでもよい城を捨てゝ、關東へ下つたことは、全然徒勞になる。その上、其處まで官軍に、反抗するとなると、藩祖樂翁公が、禁裡御造營に盡された功績も、又近く數年禁闕を守護して、朝廷に恪勤を盡した忠誠も、沒却されてしまふばかりでなく、どんな嚴罰に處せられて、當家の祭祀が絕えてしまふやうなことが、ないとも限らない。さうした危險を冒すよりも、今日の場合は、一日も早く朝廷に謝罪恭順して、桑名松平家の社稷を全うすることが、何より大切である。それには、當家には先代の御子の萬之助樣がある。當主定敬公は、美濃高須藩からの御養子であるが、萬之助樣は、當家の正統である。定敬公が、禁闕に發砲して、朝敵の惡名を被て

居られる以上、萬之助様を擁立して、どこまでも朝廷に、恭順の誠を表すのが、得策であると云ふのである。

藩士達は、武士の面目の上から、東下を潔しとし、恭順を斥けて居たものゝ、心の裡では皆、差し迫る妻子との離別を悲しみ、住み馴たれ安住の地を離れて、生還の期しがたい旅に出る不安に囚はれ、銘々心の裡では、二の足を踏んで居たのであるから、多くの藩士達は、口には出さないが、下士達の絶對恭順論に、心を傾けずには居なかつた。神籤のために、嫌々ながら、東下論に從つて居た恭順論者は、再び自說を主張し始めた。かくて、一藩は又もや烈しい混亂の裡に陷つた。

東下論の主張者である酒井孫八郎、杉山弘枝は駭いて、下士達の鎭撫方を、政治奉行の小森、山本に交渉した、二人は彼等自身恭順論者でありながら、必死に下士達を撫めて、籤にゝつて定まつた藩論に、從はしめようと焦つた。が、下士達はその主張を固守して、一歩も退かなかつた。一方東下論者（酒井杉山は、神籤に依つて定まつ

た東下を、明日にも實行しようと迫つた。政治奉行の小森と山本とは、東下論者と、下士達の板挾みになつて、下士達の鎭撫不能の責任を負ふて、城中で屠腹してしまつた。それは十二日の午前であつた。

二人の死を、轉機としたやうに――二人の死を全くの犬死にするやうに、下士達の恭順論は、何時の間にか藩論を征服して居た。東下論者は、聲を潛めてしまつた。

藩老達は、同夜左の如き、一書を尾州藩へ送つて、朝廷へ歸順の取成しを、嘆願したのである。

今般大阪表の始末柄、在所表へ相聞え、深奉恐入候に付き、上下一同謹慎罷在候抑も尊王の大義は兼て厚く相心得罷在候處不圖も、今日の形勢に立至り候段、恐惶嘆願の外無御座候何卒平生の心事御了解被成下大納言様御手筋を以乍恐朝廷へ御取成寛大の御沙汰只管奉歎願誠恐誠惶謹言

成瀬隼人正様　酒井孫八郎
吉村又右衛門
澤采女
三輪權右衛門
大關五兵衛
服部石見
松平帶刀

次いで、同月十八日、官軍の先鋒が鈴鹿を、越えたと云ふ報を聽くと、同文の嘆願書を、隣藩龜山藩へ送つた。

二十一日、鎮撫使からの御沙汰の手控が、龜山藩の手を通して、桑名藩に致された。文面は、次ぎの通であつた。

先般松平越中守依願歸國被仰出候處豈料ラン闕下ニ向ツテ發砲始末全ク反逆顯然不得止速ニ桑城退治ノ折柄過ル二十一日石川宗十郎ノ家來ニ托シ歎願ノ趣有之旁々萬之助並ニ重臣一同浪花ヨリ分散ノ諸兵ヲ引連レ四日市本營ヘ罷出御處置可承トノコト

追テ參上ノ義ハ二十三日夜五ツ時期限ニ候其節宗十郎一手ノ内ヶ以テ誘引可有之事

一藩の人々は、愁眉を開いた。歸順が容れられたからである。が、一藩の人々が、愁眉を開いたと反對に、生命の危險を感じ始めた十三人の人々があつた。それは、鎮撫使からの手控への中に、判然と名指されて居る「浪花ヨリ分散ノ諸兵」であつた。

七日に走せ歸つた宇多熊太郎、十日に歸つた築麻市左衛門を筆頭とし、その後數日の間に、近幾の間で、桑名藩の本隊と分れ、思ひ〳〵の道を取つて、本國の桑名に歸つて居たものが、凡て十三人、彼等は所謂「浪花ヨリ分敗ノ諸兵」であり、鳥羽伏見

の戰場で　錦旗に向つて發砲したものに違なかつた。

鎮撫使　らの御沙汰に依つて、彼等がその本營に召出される以上、彼等の運命は定まつたと云つてもよかつた。官軍では、桑名の投降を容れると同時に、錦旗に發砲したこれら諸兵を斬つて、朝威を明にしようとして居るのだ――と、一藩の人達は考へた。十三人の人達が、他の人々よりも早く、それに氣が付いたのは無論である。彼等は當日、家を出るときに、銘々の妻子と水杯を掬み交はした。

幼年の主君萬之助の乘つた籠の後から、麻上下を付けて、白い鼻緒の草履を穿いて、トボ〳〵と付き從ふて行く彼等を、一藩の人々はあはれな犧牲者として見送つた。

萬之助主從は、四日市の町に入ると、瓦町の法泉寺で、四つ時まで、休憩した後、龜山藩士の名川力彌に導かれて、官軍の本營眞光寺に出頭した。萬之助と重臣達は式臺の上に上ることを許された。十三人の敗兵達は、白州の上に蹲くまつて居た。

衣冠束帶に威儀を正した鎮撫使の橋本少將が、嚴そかな口調で、次のやうに云ひ渡した。

越中守反逆顯然無道至極今更申迄モ無之爲征討發向ノ處嘆願ノ趣有之旁々書面ノ通可心得

一、本城を掃除シ朝廷ニ可奉差上事

一、帶刀ノ者不殘寺院ヘ立退恭順可罷在事

十三人に對して、定まつた處分は云ひ渡されなかつた。が、萬之助及び重臣達が、桑名に歸されずに、四日市の法泉寺に抑留されたやうに、十三人の敗兵は、鳥取藩士の警護に附されて、四日市の北、一里にある海村、羽津の光明寺に幽閉されてしまつた。其處からは、海藏川原の刑場が、つひ目の先に見えて居た。

二

桑名藩で、馬廻り使番を勤めて、五十石の知行を、取つて居た新谷格之介も、十三人の中に交じつて居た。

彼は、今年廿五才の青年であつた。父が、慶應元年の三月に死んだので、當時二十二になつた格之介が、跡目を相續した。翌慶應二年の春に、彼は妻のおもとを婚つた。

新婚の夢、圓かであつた格之介は、その夏不意に京都在番を命ぜられて、數人の同僚と出京して以來、所司代屋敷のお長屋の、むさくるしい部屋で、一年半に近い間を、滿されない月日を送つて居た。夜毎の寢覺に、本國に殘して來た、うら若い妻を思ひながら。

鳥羽伏見で、敵方に錦旗が飜めくと同時に、味方の足が浮いて、何時となく總崩れとなり、淀の堤を、退却したとき、彼は何時の間にか、味方の諸隊と離れて居た。離れて居たと云ふよりも、意識して離れたと云つてもよかつた。彼は、此の道を取れば、味方に離れるかも知れぬと思ひながらも、田圃の中の小道を、南へ走つたのである。

それが、奈良街道へ出たときも、彼は後悔して居なかつた。亂軍の場合に、道に迷つたと云へば、それ譯は立つ。本隊と一緒に落ちて行けば、薩長の大軍に、西と東とから取り圍まれるに違ない。本國へ退くにも、退かれない。烈しい切破詰まつた戰が、屢々繰り返されるのに違ない。さう考へると、彼は何うにも、味方の後を追ふて行く氣がしなかつた。

巨椋の池の堤に出たときは、戰場の銃聲も途絶えて、時々思ひ出したやうに、大砲の音が、かすかに聞えて來る丈だつた。本隊を離れたのを幸に、道に迷つたと云つて、本國へ歸らう。本國へ歸つて、世の靜まるのを待たう。さう考へると、故郷の家庭の有樣が、マザ〳〵と眼の前に浮んで來た。舊臘京都を立つ前に、藩の御用飛脚から受取つた妻の消息の文面が、頭の裡に消しても消しても、浮んで來る。それに續いて妻の、初々しい笑顔が浮んで來る。結婚の當時、彼女は十六になつたばかりであつた。赤いてがらのかゝつた大丸髷が、彼には又なく、いぢらしく考へられた。彼の足は、

矢も楯も堪らないやうに、故郷の方へ向いて居た。

彼が、奈良から、伊賀街道を伊勢に出で、桑名に達したのは、一月の十二日であつた。

彼は、故郷へ歸つて來たものゝ、心ひそかに藩からのお咎を恐れて居た。が、それ自身危急に瀕して居る藩は、かうした敗兵達に對する處分などは、思ひも及ばなかつた。むしろ、次ぎ〳〵に、走せ歸つて來る敗兵達から、上國の形勢を聽くことを、欲して居たのであつた。

妻のおもとは、格之介の不時の歸宅を、雀躍して欣んだ。格之介も、自分の行動が、いゝ結果に終つたことを欣んだ。嚴密に云へば——うまく云ひ譯が立つても落伍の罪が、何のお咎もなく濟んだことを、格之介は此上なき僥倖に思つた。

差し迫る一藩の大事に脅びえながらも、蜜のやうな歡樂の日が、此の若い夫婦の間に、幾日か過ぎた。それが、再び恐ろしい不幸に依つて、滅茶々々にされるまで。

敗兵お召出しの個條が、官軍からの御沙汰の中にあると聞いたとき、格之介は色を失つた。錦旗に發砲した以上、命がないかも知れない。さうした考が、ヒシ〳〵と彼の胸に迫つて來る。愛妻のおもとと、水杯を交はすとき、格之介は不覺にも涙を流した。

三

光明寺に、十三人が閉ぢ込められてから、數日經つた。本堂に續いた二十疊に近い書院が、彼等の居室に當てられた。住持の好意に依つて、手廻りの品物が、給せられた。警護の鳥取藩士は、彼等に可なり寛大だつた。が、生死の間に彷徨して居る彼等は、みな怏々として樂しまなかつた。

人間は、何かの感情に激すると、臆病者でも可なり潔く死ぬことがある。忠君とか

愛國とか、憤怒とか慷慨とか、さうした感激で、人は潔く死ねる。が、さうした感激がなく、死が素面で人間に迫つて來る場合には、大抵の人間が臆病になつてしまふ。十三人の場合が、さうであつた。彼等は、蛤門の戰や鳥羽伏見の戰には、可なり勇敢に戰つた人達である。が、戰場から本隊と別れて、故鄕へ歸つて來て以來、忠節とか意地とか云つた感激的な心持が、心の裡に緩んで居る。其處へ、死は不意に彼等の顏を窺き込んで來たのである。宇多熊太郎、築麻市左衞門など、剛膽を以て、聞えた武士までが、茲へ來て以來、可なり沈んで居る。まして、最初から餘り勇敢でない新谷格之介が、心の裡で脅びえ切つて居たのは當然である。

最初、彼等は自分達の境遇に就いては、何も話さなかつた。みんな注意して、それに觸れるのを避けた。それに觸れることが、誰に取つても不快であつたからである。

「萬之助樣のお身上は、何うなつたであらう」

彼等の一人が云つた。

「本城の明渡しは、もう無事に濟んだかしらん」

他の一人が云つた。

「紀州へ落ちた人達は、あれから何うしたであらう。まさか、紀州家が見殺しにはしないだらう」

第三の人が云つた。

彼等は、努めて自分達以外の人々の身上を、心配して居るやうに、お互に見せかけた。が、そんな風な話をし始めても、少しもはづまなかつた。銘々自分自身心の裡に自分達の身上を思ふ心が、暗憺として居たからである。

一日經ち二日經ち、彼等の生死の不安が、益々濃くなつて來るに連れ、彼等はもう他人のことなどは、話して居る餘裕が無くなつて居た。

廿七日の午後である。十三人の中では、一番輕輩の近藤小助と云ふ男が、到頭口を切つた。それは、皆が口に出したくて、而も妙な外見から、口に出せなかつた言葉で

ある。

「時に、われ〳〵は、一體何うなると云ふのだらう。もう四日にもなるのに、何の御沙汰もない」

彼は、小聲で同僚に、さう話しかけた。が、異常に緊張して居る十三人の耳は、小助の囁きを、聞き落さなかつた。みんなは、一齊に小助の方を見た。

「さあ！ それぢやて」 一番年輩の足輕小頭が、小助の問を受けて答へた。「もう、何とか御沙汰がある筈ぢやが、もしかすると、京都へ一旦伺ひを立てたのかな。もしそれだと往復四日かゝるとして、御沙汰があるのは、今日か明日ぢやて。もう、どんなに遲くても二三日ぢや」

「首が飛ぶのがかい？」

小助は、蒼白い顏に、苦笑を洩しながら、さう云つた。みんなは、ヂロリと小助の方を見た。その眼には、不吉な不快な言葉を、無遠慮に使ふ小助に對する非難が、一

樣に動いて居た。

「いや、さうとは限るものか。朝廷の御主旨は萬事御仁慈を旨とせられると云ふから、取るに足らぬ我々の命を召さるゝ筈はない、取越苦勞はせぬものぢや！」

足輕小頭は、小助を窘めるやうに云つた。

「いや、お言葉ぢやが、鎭撫使の參謀には、長州人が居ると云ふからな。長州人と我我とは、元治以來犬と猿のやうに啀み合つて居るからな。長州征伐の時、幕府の軍勢が、浪花を發向の節、軍陣の血祭に、七人の長州人を斬つたことが、御座るぢやらう。あれは、桑名藩で、蛤門の戰で捕へた俘虜だつた。あれを長州人は、ひどく恨んで居るさうぢやから、あの轍で、征東の宮が、伊勢をお通りになるときに、屹度われ〳〵は、その血祭と云ふのになつてしまふのだ」

小助は、絕望したやうに、自棄半分に、一番彼等に取つて不利な想像を、喋べり散らして居た。が、みんなは、それを單に、小助の想像だと貶してしまふ譯には行かな

かつた。

鎮撫使からの、手控への裡に、「浪花ヨリ分散ノ諸兵」と、指摘されてある以上、それは彼等に對する有罪の宣告文であつた。彼等が刑罰を受けなければならぬことは明かだつた。刑罰を受けなければならぬ以上、彼等は死を覺悟する必要があつた。かうした亂世に在つては、死罪以下の刑罰は、刑罰ではなかつたからである。

「あはゝゝ、みんなこれぢやゝゝ。覺悟をして居れば、何も狼狽へることはない」

十三人の中では、一番身分の高い築麻市左衞門が、左の手で首筋を叩きながら、快活に笑つた。が、それに次いで、誰も笑ひ出す者はなかつた。いや、市左衞門の笑ひ聲までが、一種悲慘な調子を帶びて、消えて行つた。

格之介は、緣側の柱にもたれて、皆の話を聞かぬやうな顏をしながら、その癖一番氣にして聞いて居た。首だとか覺悟だとか云ふやうな言葉が、話されるごとに、彼は目の前が暗くなるやうな氣持になつて居た。

彼はどう考へ直しても、覺悟と云つたやうな心持を、想像することが出來なかつた。彼は、殺されると云ふ氣持を、頭の中に思ひ浮べても、身顫ひがした。

が、格之介が嫌がらうが、嫌がるまいが、死は刻々、十三人の身上に、襲ひかゝつて來るやうに感ぜらた。

四

翌廿八日は、朝から快く晴れた。春が來たことが、幽囚の人達にも、感ぜられた。寺が高地に在るために、塀ごしに伊勢灣の波が見えた。波の面までが、冬らしい暗綠色を捨てゝ、鮮かな綠色に凪いで居た。

空を掩ふ樫の梢を洩れた日の光が、庭の蒼い苔の上を照して居た。庭の右手には、建仁寺垣があつて、垣越に墓地が見えた。山から出て來たらしいひたきが、赤と青と

の翼を、ひらめかしながら、午前中墓石の上を、アチコチ飛び廻つて居た。

墓地は、黑い板塀に圍はれて居た。塀の向ふには、草が蒼みかけようとする廣い空地があつた、其處で時々、警護の鳥取藩士が、調練をして居た。

一昨日あたりから、料紙硯を寺から借りて、手紙を認めるものが多くなつて居た。今日は、それが殊に烈しい。さうした手紙が、何う云ふ內容を持つて居るかは、みんなに分つて居た。

「木村氏、その後は拙者が拜借したい」と一人が云ふと、

「その次ぎは、拙者に」

第三の人が、傍から云ふ。

料紙と硯とは、次ぎから次ぎへと渡つた。さうして、午前中に五六人も、手紙を認めたが、格之介はさうした心持になることが、出來なかつた。彼は、覺悟とか遺書とか、さうしたことを出來る丈、考へまいとした。自分の頭が、さうした方面へ走し

るのを、出來る丈制止した。王道を以て、新政の要義として居る朝廷が、妄りに陪臣の命を取るやうなことは、萬に一つもないと考へようとした。又、若し我々が斬られるのなら、四日市の本營に呼び出されたあの晩か、遲くともあの翌日には、斬られて居る筈である。今まで、捨てゝ置かれる筈はない。

桑名藩を罰すると云ふのなら、藩主の定敬公か、鳥羽伏見の戰ひで、全軍を指揮した森彌左衞門をでも、斬るのが當然である。自分のやうな、五十石取の使番を、

彼は、一生懸命に出來る丈有利に、明るく考へようとした。が、同僚の誰彼が、遺書を認めて居るのを見ると、暗い穴の中へでも、引きづり込まれるやうな、イヤな心持がした。自分の明るい想像が、滅茶々々に搔き亂されるのであつた。

午後の事である。格之介の前に立ちはだかつて、ぢつと空地の方を見て居た徒士の木村清八が、獨言のやうに云つた。

「あゝ、彼處へ家が建つのだな。段々暖くなるのだから、普請にはいゝ時候だな」

木村の言葉を、聞く前から、格之介はそれに、氣が付いて居た。先刻から、材木を積んだ一臺の車が、何處からともなく、空地へ引かれて來て居る。その材木を、大工らしい男が三人、車から下して居る。

茲に來てから、四日の間、ボンヤリ床の間や天井や、庭や墓地などを見て居た格之介は、さうしたものに、可なり飽き〳〵して居た。彼はかうして新しい見物が出來たことを、欣んだのである。

「うむ！ 家を建てるのかな。が、こんな田圃の中にぽッつり建てる譯はない。木組をしてから、何處かへ運んで行くのだらう」

彼は、心の裡でそんな事を考へながら、ぢつと大工達の働くのを見て居た。

が、それを見て居るのは、格之介と木村清八と丈ではなかつた。どんなに、死が迫つて來て居る時でも、人間は退屈するものである。十三人の中で、先刻から碁を圍んで居る築麻市左衞門と宇多熊太郎との外は、みんな外へ出て大工の働くのを見て居た。

三人の大工は、材木を下してしまふと、銘々に手斧を使ひ始めて居た。手斧が、木に喰ひ入る音が、澄み渡つた早春の空氣の中に、暫らくは、快く響いて居た。

が、其の裡に緣側に立つて居る人々は、單純な大工の動作に飽いて、いつとなく部屋の中へは入つてしまつた。格之介と清八と丈は、まだ緣側を離れなかつた。

大工は、その材木で幾本となく、高い柱をこさへて居ることは明かだつた。そして、一方の端を、土の中へでも打込むやうに、尖らせて居るのだつた。その裡に、さうした丸い柱の數も、格之介には分つた。

大工は、十本の柱を、作へ上げてしまふと、今度は車に積み殘してあつた材木を、下しにかゝつた。

見ると、それは幅が一尺位、長さが一間位あらうと思はれる板だつた。厚みは、一寸にも近かつた。板の數は、數へると五枚あつた。

「怪しいなあ。一體、何をこさへるのだらう」

傍に居る清八が、首を傾しげながら、呟いた。格之介にも、それが不思議に感せられて居た。彼も、大工が何を作らうとするのか、少しも見當が付かなかつた。

その裡に、大工は銘々、一枚の板と二本の柱とを揃へると、板の兩端へ一本づゝ柱を當がつた。「おや！」と、思つて居る内に、大工は道具箱から、一尺に近い鑿を取り出して、柱と板との繼目に當がうと、大きい金槌へ、一杯の力を籠めながら、カーンと鋭く打ち込んだ。

今まで、好奇心丈で見て居た清八が、チラリと格之介の顔を振り返つた。清八の顔には、血の氣がなかつた。唇が、ビク〳〵動いた。それを見返した格之介が、もつとあはれな顔をして居たことは無論である。二人は、先刻からウカウカと、獄門臺が作られるのを見て居たのである。

「こりやいかん！　諸君、あんなものを作つて居る。あんなものを」

清八は、救ひを求めるやうな悲鳴を揚げた。五六人駭いて、縁側に飛び出して來た。

が、みんな一目見ると、色を易えてしまつた。誰も、何とも云はないで、縁側の上に釘付にされたやうに立つて居た。

碁を圍んで居た築麻市左衞門までが、立ち上つて來た。遉の彼も、一目見ると、かすかではあるが、顏色が變つた、

「うむ！　謎をかけ居つたな。われ〳〵に、覺悟をせよと云ふ謎だな」

彼は重くるしい口調で、みんなの沈默を破つた。

一番おしまひに、出て來た宇多熊太郎は、一番動じて居なかつた。

「もう諸君！　今夜がお別れぢや！　刻限は明日の夜明だな、按ずるに」

彼は苦笑しながら、みんなを見返つた。

「五人丈は梟首か。拙者は免れぬな、あはゝ」

市左衞門が、さう云つた。彼も獄門臺の數を數へて見たのである。

格之介は、先刻から、止めようとしても止まらない胴顫ひが、身體の何處からとも

なく、全身に傳はつて來るのである。

獄門臺の數が五つ。それを數へたときに、彼は自分の死首が、その上に載つて居るやうな氣がした。もうそれで、彼が殺されて、梟首されることは確だつた。十三人の中で、八人まで輕輩の士である。お目見得以上の士は五人しか居ない。彼はその五人の中で、家の格式が丁度眞中に位して居る。

「五人丈は、獄門になるのは判つた。が、後の八人はどうなるのだらう。斬首かな、それとも命丈は助かるか知らん」

足輕の中で、一番年輩の男が、さう云つた。彼はまだ一縷の望みを、繫いで居た。

「助かる！　たわけたことを云はれる！　今になつて、助かることを考へる。積もつても見るがいゝ。五人の方々が、梟首される以上、われ〳〵が助かる筈があるものか。武士たるものに、梟首は極刑ぢや。五人の方々を、極刑にする以上、われ〳〵を許す筈がない。打首丈なら、まだ仕合せぢや。御覽なされい！　今にも、もう一臺材木を

引いた車が參るから」

加藤小助が、地獄の獄卒でゞもあるやうに、憎らしげにさう云つた。その癖、彼の顏色にも人間らしい色は殘つて居なかつた。

八人の輕輩の人達は、加藤の言葉を不快に思つた。が、その眞實を認めない譯には行かなかつた。五人の上士達が、梟首される以上、殘りの八人が、縱令梟首は免かれるにしても、打首丈は確かな事實だつた。

殊に、五人の中には入つて居る格之介が、死を免かれ得るやうな理由は、少しも考へられなかつた。死は、たゞ時の問題として、彼の前に迫つて來た。彼も、何うにかして、死を待ち受ける準備を、しなければならなかつたのだ。

獄門臺が、スツカリ出來上つて、その氣味の惡い恰好を、ズラリと地上に並べて居る時だつた。燃ゆる赤熊の帽子を着た鳥取藩の士官が、空地へ現はれた。士官が、何か合圖をすると、大工達は一つの獄門臺を、三人で擔ぎながら、寺の方へ近づいて來

た。何をするのかと思つて居ると、寺の板塀の上に、獄門臺の板が、ぬつと現はれた。見ると、今までは氣が付かなかつたが、板の丁度中央に、死首を突ささす釘が打つてあつて、それが夕日の光を受けて、キラ〳〵と光つて居るのであつた。

それを見ると、宇多熊太郎は、縁側の板を踏み鳴らしながら怒つた。

「あゝ、あんないやな事をしやがる。あんな嫌がらせをする！」

が、怒り得るものは幸ひだつた。格之介は、それを見ると、恥も外見もなく、身體がガタ〳〵と顫え出した。

五つの獄門臺は、次ぎ〳〵に塀に、立てかけられた。眞新しい材木が、古い板塀の上にマザ〳〵と、夕日の中に浮んで居る。

「あゝ、殘念だ！　諸君、こんな汚はしいものを見て居ないて、障子を閉めようでは御座らぬか。武士たるものを、罪人同様に恥しめ居る。あゝかうと知つたら、匕首の一本位隱して居るところであつた」

宇多熊太郎は、忌々しさうに舌打した。

みんなは、部屋には入つて、障子を閉めた。が、格之介には、障子越に、五つ並んだ獄門臺が、アリ〳〵と見えた。

それ限り、夕食の時まで、誰も一口も、口を利かなかつた。

夕食の膳が出ると、築麻市左衞門は、所化の僧に酒を所望した。

「各々方、今夜はお別れで御座る。我々に無禮を働く鳥取藩士への面當に、明日は潔い最後を、心掛けようでは御座らぬか。各々方が、平生の覺悟を拜見したう御座る」

十二人までは、遺に惡びれた所はなかつた。盃が、しめやかに廻はつた。

が、格之介は、飯も咽喉へは通らなかつた。一杯喰つた飯が、もどしさうに、何時までも胸に支へて居た。

彼は、何うしても死ぬ氣にはなれなかつた。切破詰まつて、死ぬにしても、もう一度妻の顏が見たかつた。もう一度妻と――、妻と最後の名殘りを惜しみたかつた。が

妻などゝ云ふことを考へないでも、死その物が、何うしても嫌だつた。彼は、何うにかして死にたくなかつた。まして、殺された後に、自分の首が、獄門臺に晒されることを考へると、どんなことをしても死を免かれたかつた。もう、とつぷりと暮れてしまつた障子の外の、闇の彼方に、白木の獄門臺が、ズラリと並んで居ることを考へると、水のやうな寒む氣が、全身を流れるのであつた。

その翌くる朝、桑名の藩士達は銘々、覺悟を定めて床を離れた。が、起き出てたものは、十三人ではなかつた。格之介は、夜の裡に警護の者の目を盜んで逃亡してしまつて居たのである。

五

「臆病者！　卑怯者！」

十二人は、口々に格之介を罵しつた。が、中には、うまく逃亡した格之介に對する心の裡の羨望を、さうした言葉で現はして居るものもあつた。

築麻市左衞門から、格之介逃亡の旨を、警護の鳥取藩士に申出でた。遺に、その推定された逃亡の理由までは云はなかつた。敵となつて居る他藩の人に對し、同藩の者を臆病者にはしたくなかつたからである。

「有様は、關東へ下つて、慶喜公の旗下に加つて、一働き致さうとの、所存と見え申す」

市左衞門は、格之介逃亡の理由を、かう説明した。

それを聽いた鳥取藩の隊長は、苦い顔をした。

「それは近頃、心外なことぢや。武士は、敵味方に別れても、相見互ぢやと存じたに依つて、かほど迄、寛大な取扱ひを致したのは、われらが寸志ぢやに、それが各々方に、判らなかつたとは、心外千萬ぢや。いや、よう御座る！　鎮撫使から預つた大事

な囚人を、逃したとあつては、拙藩の恥辱で御座るほどに、草を別けても探し出す所存で御座る。各々方を信用したのが、拙者の不覺で御座る」

隊長は、可なり憤慨して、開き直つた。

市左衛門も、相手から寛大な取扱ひと云ふ言葉を聞くと、ムッとした。武士たるものに、汚はしい刑具を見せ付けて、侮辱を與へて置きながら、よくもそんなしらぐしいことが云へると思つた。

「ふむ！　あれで寛大な取扱ひと申さるゝか」

彼は、吐き出すやうに云つた。

「いかにも」隊長は、屹となつて答へた。「拙者の計ひで、各々方に、かほど自由を與へて御座るのが分らないのか。錦旗に發砲した朝敵ぢやほどに、手錠をかけ足械をかけても云ひ分はない筈ぢや。それを、起居も各々方の隨意にさせてある。番兵も付けず、看視も致さないのは、何の爲ぢや。武士たる各々方が、一旦恭順を表せられた以

上、萬に一つ間違はないと思つたからぢや。それを、盜人か何かのやうに、夜中ひそかに脱走する……」

「云はれな！」市左衛門は、中途で烈しく妨ぎつた。「それほど、われ〳〵を武士として扱ふと云はるゝ貴殿が、あの指圖は何事ぢや。われ〳〵は町人百姓では御座らぬぞ。朝廷の御處置が定まつたら、何時にても首を差し伸べる覺悟は致して御座る。それをあの指圖は何事ぢや。貴殿こそ、われ〳〵を盜人か無宿者同様に心得て御座る。あれが、武士を遇する道か。あれが、武士に對する寛大の取扱ひか」

市左衛門の眼は、血走つた。もし、彼が帶刀を許されて居たならば、左の手はきつと、その柄頭を握りしめたに違ない。

市左衛門に指ざされて、鳥取藩の隊長は、墓地を越えて、板塀の方を見た。彼の眼にも、黑い板塀と、パッキリした對象をなして、ぬつと突き出て居る、獄門の首臺が、眼に映つた。それを一瞥したときに、彼は明に狼狽した。

「やあ！　これは〳〵、いかい不念ぢや。許されい〳〵」

詫びようとする隊長を押へて、市左衛門は勝ち誇つたやうに云つた。

「われ〳〵は、武士で御座る。あのやうに、御親切に悟されいでも、腹を切る覺悟は、平生から致して御座る。今日か、但しは明日か、時刻をさへ知らして下されば、それで澤山ぢや」

市左衛門の憤慨を、肯きながら聽いて居た隊長は、彼の言葉の終るのを待つて、態度を改めた。

「それは、飛んでもないお考違ぢや。拙者の不念から、部下のものゝ致した粗相ぢや。各々方にあのやうな不吉なものを見せて、何とも申譯が御座らぬ。お氣に止められるな。各々方を處刑、そのやうなお沙汰は、氣もないことぢや。いや、昨夜も本營へ參つて、聞いた噂に依れば、桑名藩の方は、主從とも何のお咎もなからうとの事ぢや。あの獄門臺で御座るか……」

さう云つて、彼は次ぎのやうな話をした。

丁度、有栖川宮の先發たる橋本少將、柳原侍從が、錦旗を擁して、伊勢へはいつたと同時に、近江から美濃へは入つた官軍の別働隊があつた。彼等は、赤報隊と稱して、錦の御旗を先頭に立て、二百人に近い同勢が、鎮撫使の萬里小路侍從を取り圍んで居た。彼等の、多くは、陣羽織に野袴を穿いて、舊式の六匁銃などを持つて居たが、右の肩口には、孰れも錦の布片を附けて居た。彼等は、美濃には入つてから、所在に農兵を募つた。美濃の今尾、竹腰伊豫守の城下に達したときは、同勢七百人に近かつた。小藩の今尾では、不意の官軍に駭いて、家老が城下の入口まで出迎へた。彼等は今尾藩へ三千兩、城下の町人に二千兩の軍用金を命じて、一日悠々と、軍隊を休めてから、南に下つて、大垣の南八里の高須藩へ殺到した。

高須の、松平中務大輔の藩中も、錦旗の前には、目が眩んでしまつた。赤報隊は、其處でも、一萬兩に近い軍用金を蒐めた。今尾高須の二藩を、慴服させた赤報隊は、

意氣揚々として、桑名藩へ殺到しようとして、桑名城の南、安永村に進んで、青雲寺と云ふ寺に、本營を敷いた。その夜である。鳥取藩と藝州藩の諸隊が、此青雲寺を取り圍んだのは。錦の布片を附けた同志が、烈しく戰つた。茲まで、附いて來た農兵隊は、蜘蛛の子を散らすやうに逃亡した。僞の萬里小路侍從は、流彈に斃れた。その場で、殺された者が五十人に近かつた。捕はれたものが十七人、それが明朝、海藏川原の刑場で、斬られると云ふのである。その裡で、僞の萬里小路侍從と他の四人の首級とが、梟首せられると云ふのであつた。

「獄門臺は、右のやうな次第で、作らせたもので御座る。地上に於いては、調練の邪魔になるほどに、あのやうな粗相を致したので御座らう。不念の段は、拙者から幾重にも、お詫びいたす。許されい〳〵。これは飛んでもない粗相ぢやつた。はゝゝゝは、ゝ、が、間違てめでたい！〳〵」

聞いて居る裡に、桑名藩の人々の相好が崩れて居た。隊長の語り終つた頃には、そ

れが湧き立つやうな哄笑に變つて居た。彼等は、腹を抱へて笑ひながらも、眼には一杯の涙を湛へて居た。

六

その誤解は、うちとけた哄笑で、濟んでしまつたけれど、鳥取藩士の格之介に對する追窮は、それでは濟まなかつた。彼等は藩の面目にかゝはる一大事だから、何うあつても探し出すと揚言した。東海道筋には、官軍が滿ち〳〵て居る故に、江戸へ下り得る筈はない、近在に潜んで居るに違ないとあつて、十人二十人、隊を組んだ鳥取藩士は、四日市桑名名古屋を中心に、美濃伊勢尾張の、三國の村々在々を隈なく搜索した。その中の一隊は員辨川に添ふて、濃州街道を、美濃の方へ探して行つた。

桑名の西北六里、濃州街道に添ふて、石稗と云ふ山村があつた。山から石灰石を產

するので、石灰を燒く窯が、山の中に幾つも散在した。一隊が、此村に達したとき、村人の一人は、此の石灰を燒く窯の一つに、武士體の男が、二三日來潛んで居ることを告げた。それを聞いた一隊の人々は、勇み立つた。彼等は庄屋に案内させて、その窯を、右と左から取り圍んだ。

火のない窯の中から、駭いて飛び出したのは格之介であつた。彼は、自分の家の若黨の實家を頼つて、人目に遠い山中の窯の中に、隱匿はれて居たのであつた。彼は官兵を見ると狼狽した。捕へられることは、彼に取つては死を意味して居た。彼は、身を飜して、窯の背後の、二間ばかりの谷を飛び越えると、雜木の生ひ茂つた山の中腹へ、逃げ込まうとした。

「えい！　まだ逃げ居る！　未練な奴ぢや。射て！　射て！　かまはぬ、射て！」

隊長はいらつて叫けんだ。

二三人の兵士が、新式のゲーベル銃で、折敷の構をした。烈しい銃聲が、山村の靜か

な空氣を動かした。格之介のやせた細長い身體が、雜木の幹の間で、クル〳〵廻つたかと思ふと、仰けざまに倒れたまゝ、動かなかつた。

越えて數日、海藏川原に、並んで立つて居た五つの獄門臺から、赤報隊の元兇達の首級は、取り捨てられて居た。そして、その後代りのやうに、その中央の獄門臺に、若い武士の首級が一つ、洒されて居た。

捨札には達筆で、次ぎのやうに書いてあつた。

桑名藩　新谷格之介

右者京幾ニ於テ錦旗ニ發砲シタルニ依ツテ羽津光明寺ニ謹愼被仰付候ニモ拘ラズ潛カニ脫走ヲ企テ江戸ニ下向再ビ錦旗ニ抵抗致サントシタル段重々不埒至極依テ銃殺ノ上梟首スルモノナリ

戊辰二月　官軍參謀

格之介を除いた十二人の人々は、その年の四月、何のお咎もなく無事に、歸藩を許された。

格之介の逃亡の理由が判るにつれ、桑名藩士も、官軍の人達も、格之介が風聲鶴唳に駭いて逃走を企て、捨てぬでもよい命を、捨てたことを冷笑した。

が、何うして格之介を、嗤ふことが出來よう。彼は確に、自分の首が載る獄門臺が、作られるのを見て居たのである。

義民甚兵衛

一

義民甚兵衛は、南海道讃岐國香川ノ郡弦打村の産であつた。父は、甚七と云つて、二町餘の田地を持つた小農だつた。母はひさと云つて、同村の百姓何某の娘であつた。

甚兵衛は、跛者であつた。生れながらの跛者であるとも云ひ、幼少の折、母が誤つて高所から、取り落した爲だとも傳へられる。

が、孰れにせよ。甚兵衛の半生は不幸であつた。跛者であることが、最大の原因だつた。が、そればかりではなかつた。三歳の時、彼は母を失つたのである。

父は、第二の母を入れた。それは質朴な農婦ではなくして、城下高松の茶屋女であ

つた。性質强慾にして邪慳だつた。無論、先妻の遺兒たる甚兵衞を、愛する筈はなかつた。邪慳の筈は、屢々幼い甚兵衞の皮膚を襲つた。

繼母に男子が生れるに及んで、甚兵衞に對する虐待の手は、益々苛酷になつた。父は如法の好人物であつた。心窃かに、不具の甚兵衞を愛して居たけれども、悍邪なる妻の非道の仕打を、差し抑ふる力はなかつた。

幼い跛者は、薪を刈らされ、水を汲まされ、家事の苦役一とし、そのかよわい肩に、かゝらぬものはなかつた。

甚兵衞を、もつと不幸にするやうに、繼母には、次ぎ〳〵に男の子が、生れた。どの子もどの子も、長ずるに從つて、その兄を蔑すむことを、母から敎へられた。幼い弟どもは、徒黨して不具な兄を苛めた。

甚兵衞が、二十四歲になつたとき、弟達は二十、十八、十七になつて居た。

「甚兵衞！　あれをせい！　これをせい！」

弟達は、兄を僕のやうに使ひ廻した。否、實際繼母の手に依つて、何時の間にか、僕のやうな待遇を受けて居た。牛小屋の片隅に、床を張つた狹い場所が、彼の起臥に當られて居た。彼は、其處に蠅や蚊に苦しめられながら、日中の苦役に疲れた體を、横へるのであつた。牛の糞汁から起る惡臭が、何時の間にか、彼の體にも浸み渡つて居た。食事は一家の者が、終つた後、質も量も劣つたものが、犬か猫かに與へられるやうに、臺所の片隅に彼のために、用意せらるゝのに過ぎなかつた。

「一人前の身體でもねえ癖に、何云ふか！」

繼母は、二言目にはさう云つて甚兵衞を叱した。その癖、一人前も二人前もの勞働を、この不具者に强いて居た。彼は、朝早くから叩き起され、夜遲くまで夜業を强いられた。もし、彼が少しでも不平を洩すと、弟達は忽ち此の憐れな兄を罵倒し打擲した。

形は人であるけれども、境遇は牛馬よりも劣つて居た。牛馬より苦しまされて居た。繼母や弟に對する無念は、肝に銘じ骨に徹して居たけれども、何うともする事も出來

なかつた。

近隣の人々は、甚兵衛の身を、深く憐れんだ。が、姦惡な繼母の恨みを買ふのを怖れて、何人も口出しする者はなかつた。

二十五の時に、甚兵衛は父を失つた。父が生きて居る間は、彼の境遇はまだよかつた。父は陰日向になり、それとなく甚兵衛を、劬(いたは)つて居た。臨終の床でも、不具な長男のことが、一番氣懸りになつたのだらう。「甚兵衛を、ようしてやれ！　ようしてやれ！」と幾度も繰り返した。

が、さうした遺言て、母や弟の心が、少しても改まる筈はなかつた。否、父の死は、一層甚兵衛を不幸にした。もう全く何の遠慮もなくなつた繼母と弟達は、甚兵衛を酷使し虐待した。

長男が、當然受け繼ぐべき家督は、弟に奪はれた。そればかりでなく、文字通に牛馬の如く、虐(しひた)げられ賤しまれるのてあつた。

それでも、甚兵衛はよく隱忍した。二十前には、弟等が餘りに非道な振舞をすると、思はずカッとなつて、立ち向つて行くことなどもあつたが、二十を越すと、何時の間にか、何うにか諦めたものと見えて、罵られても、叩かれても、たゞ默々として、動いて居る丈だつた。

二

甚兵衛が二十七歳になつた時だつた。文政十一年八月九日子日子の刻より、四國九州一帶に、北東の大惡風吹き出し、次第に嚴しく吹き荒れ、雨は霰の如く、天は一面に電光火の降る如く、地は世界を覆す如く震つた。大海より津波湧き出で、諸川大洪水となつた。大風二日吹き止まず、倒れ家死人の數、諸國を通じて、何萬何千と云ふ數を知らなかつた。

讃岐は、大風の中心を離れて居た爲に、人畜の死傷、倒れ家、屋根捲などは、少かつたが、作物の被害は、見るも無慘であつた。刈入れに間もない田は、見る影もなく吹き荒されてしまつた。早稲はやゝ取入れた所もあつたが、中稲は僅かに二三分の作、晩稲に至つては一分の收穫さへも疑はれた。

恐ろしい恐慌が、百姓達の心を襲つた。天明の大飢饉が、再び來たやうな慘狀だつた。わづか五十匁内外の米相場が忽ち百二三十匁を呼ぶに至つた。僅かに殘つて居る古米、麥などを唯一の食糧として、來る年の秋まで、生き延びる外はなかつたのである。

甚兵衛の家も、その例に洩れなかつた。放埒な主婦を戴く、その家にさしたる貯へが、ある筈はなかつた。

一家は、出來るだけ、食を節することを、餘儀なくされた。その中で、最も慘なのは甚兵衛だつた。

「穀潰し奴！」と云ふ罵倒が、前よりも頻々と、彼に向つて投げられた。罵しる者に

も、罵しられる者にも、此の言葉の意味が痛切に、響いた。それ丈、甚兵衛は堪らなかつた。

九月十月になつて、此年の收穫が、平年の二分にも達しないことが分ると、一家は三食を二食に、減らさなければならなかつた。さうなると、甚兵衛の受くる分配は、更に僅少になつた。彼は終日、空腹に苦しんだ。餘りの苦しさに堪へかねて、餘分の食を求めると、弟達は彼を折檻し打擲した。十一月になつてから、甚兵衛は終日、たゞ一椀の粟を與へられるのに過ぎなかつた。彼は、獸のやうに野山をうろついて食を求めた。が、餓えて居る者は、甚兵衛丈ではなかつた。到る處の野山は、食に飢うる人々に依つて、漁り盡くされて居た。

十二月に入ると、一家はもつと窮迫した。繼母や弟達は、不具な甚兵衛に與へる、一椀の粟をさへ惜しみ始めた。

長い間、母や弟の非道に屈して居た甚兵衛も、生きながら餓死せしめらるゝのには、

堪へなかつたのだらう。彼は、母や弟の眼を忍んで、窃かに食を盗んだ。この事が、發覺すると、弟達は忽ち彼を捕へた。激しい打擲を與へた後で、彼を土藏の中に、檻禁したのだつた。たゞ水丈が、與へられる丈で、二三日が過ぎた。母や弟は、心窃かに甚兵衞の餓死を待つて居た。尤も、餓死と云つても、さう珍らしいことではなかつた。飢饉のため、讃岐一國到る處に、餓莩が道に横はつて居たからである。

が、丁度餓死せんとする甚兵衞の危急を救ふやうに、高松領一圓に前代未聞の百姓一揆が蜂起したのである。

三

讃岐十八萬石の中、高松領十二萬石は、松平讃岐守の所領だつた。元來讃岐は、地味豊に、表高以上の藏入があり、讃岐侯は諸侯の中にても、裕福な家であつたが、近

年藩主を初め、老臣達奢に長じ、種々新法を立て、誅求を事とした爲、君民の間、兎角和合を缺くに至つた。

然るところ、此年は天明以來の大凶作であるため、領内一統の百姓共擧つて御年貢御免を願ひ出でた。道理至極な嘆願であつた。が、奢侈のために、藩政の窮乏を致して居る家老達は、頑として聽き入れなかつた。

最初に、宇多郡二十三ヶ村の百姓達が立つた。近き村々遠き村々、響の物に應ずる如く立つた。野にも山にも、竹槍蓆旗が充ちた。寺々の鐘を打ち鳴らし、社々の太鼓を打つた。總人數二萬餘人、高松の城下を指して、潮の如く押し寄せて來た。彼等は道々、大百姓の家二百軒ほど打ち碎き、家財道具殘らず打ち毀した。酒屋にては酒を出させ、相應の構の家にては、飯を焚かせ、之を速にせざる者は、悉く打ち潰した。百姓家一軒に付き、一人宛の方人(かたうど)を強いた。應ぜざる者は、即座に打ち殺すと脅した。一揆の數は、刻々增した。城下の入口なる弦打村に達した時總人數五萬人、加擔の村

村百八十九ヶ村に及んだ。

甚兵衛の家は、高松の城下に入る道筋に當つて居た。覆面をした一揆の首領が、甚兵衛の家へも、ぬつとは入つて來た。竹槍を、突き付けて加擔を迫つた。弟達は、みんな憶病だつた。彼等は、後難を怖れて、二の足を踏んだ。母は、姦計を廻らした。彼等は、不具な甚兵衛を强いて、一揆に加らしめたのである。甚兵衛は、不自由な足に、竹槍を杖つきながら、一揆の列中に加つたのである。

城下の入口に、香東川が流れて居る。高松に入る唯一の要所だつた。家中の人々は、此の要害で、一揆を沮まうとした。老臣藤野主馬を初め、家中の武士五百餘人、半弓を構へ鐵砲を持ち、警戒をさ〳〵怠らなかつた。が、死を決した百姓の勢は、潮のやうである。苛政の下に餓死するよりも、戰つて死ぬことを欲して居た。五萬に餘る人數は、手に〳〵河原の石を掴んで殺倒した。五十挺の鐵砲百挺の半弓も、多數の前には、何の力もなかつた。家中の面々は、素破と云ふまに、一町も追ひ崩されてしまつた。

丁度此時だつた。郡奉行の松野八太夫は、たゞ一人駒を躍らして、一揆の中に突き進んだ。郡奉行の責任として、彼は一命を賭しても一揆を喰ひ止めやうと欲したのである。

「靜まれ！靜まれ！　何事によらず、願の筋は、お聞き屆けあるやう、取計ひ遣はすぞ。一旦引き退き、おとなしく願ひ出でよ。かく大勢にて、城下へ相詰め、騷動に及ばゞ殿は申すに及ばず、公儀に對しても、恐れ多いぞ。」

彼は、聲を乾して、叱咤した。が、熱狂した群衆には、何の效果もなかつた。大きな礫が、風を切つて、彼の眉間に當つた。アッと云ふ間に、彼は馬上から轉落した。一揆は凱歌を上げながら、その上を踏み躪つて通つた。

家中の人々が、崩れる後を慕ふて、一揆は城下に入つた。

城下に入つた一揆は、町々家々を思ひ存分に打ち碎いた。家老目付など、駒を飛ばして、一揆に近づき懇々利害を說いて退散を迫つたけれども、何の效もなかつた。

「日頃邪(よこしま)なる政道にて、下を苦しめ、此の期に及んで何を云ふぞ。それ奴に物云はすな。」と、口々に叫けんで、殺到する勢であつた。かくては、一藩の大事にも及ばんかと、人々安き心もなかつた時だつた。大野求女と云ふ、七十に近き老人、たゞ一人駒を進めた。當時退隱の身であつたが、藩主の妾腹の兄として、多年藩政の衝に當つて、重望を擔つた人だつた。遺に、一揆達も、求女の前には從順だつた。彼は、白髮の頭を振り立てながら「願の趣き、身に換へて聞き屆けて遣はすぞ。早々退散せよ、退散せよ！」と、渾身の力をこめて叫けんだ。

一揆も此の篤實な老人を信じた。彼等は言質を得た後、揚々として村々へ、潮の引く如く退散した。

四

一揆は、事なく收まつた。高松領一帶年貢御免の御觸が、百姓達を欣ばした。が、さうした恩惠を施すと共に、一揆の發頭人の詮議が嚴しかつた。殊に香東川の畔で、倒れた郡奉行松野八太夫の下手人の詮議は嚴重を極めた。藩では、上の權威を示すために、理が非でも下手人を求めた。かうした下手人を、不問に附しては、一藩の威信に係(かゝは)ることだと揚言した。

が、下手人が容易に、見付かる譯はなかつた。萬人が投げた礫のどの一つが、致命の傷を與へたかは、投げた當人にも分らなかつた。容易に下手人が出ぬと見ると、藩では非常手段を講じた。松野八太夫が倒れた場所が、弦打村の地域であるのを、口實として弦打村全體に、加害の責任を負はしたのである。それは、暴斷であつた。が、かうした暴斷は、その時代に有り觸れた事だつた。

庄屋及び名主は、下手人の判明する迄、手錠を打たれた。村の老人達は、鳩つて議を凝らした。が、彼等に何の名案もなかつた。到頭誰かゞ、一策を考へ出した。

それは、一揆に方人した人々で、籤を引くことだつた。そして、それに當つたものが、諸人の爲だと諦めて、名乘つて出ると云ふのだつた。

皆がそれを名案だと賛成した。が、實行に移つる段になると、皆が二の足を踏んだ。籤に當つたと云ふ丈で、恐ろしい罪を、引き受けることが、餘りに馬鹿々々しかつた。

評議が、何の解決も付かずに、四五日も續いた。上役人の督促は嚴しかつた。若し下手人が出ない場合には、庄屋名主一同屹度曲事たるべしと脅かされた。

猶豫の日限が切れると云ふ夜であつた。村の人々は、最後の評議を開いた。是が非でも下手人を作らうと云ふのであつた。

「石一つ投げた人はないか。松野様に石一つ投げた人はないか。もしあれば、その石が當つたと勘辨して、名乘つて出て呉れるのぢや。村一統、いゝや百八十九ヶ村の人人の身代りになる事ぢや。名乘つて出たからと云つて、見殺しにはせぬぞ。村一統で愁訴して、命丈は助けるぞ。」

手錠を掛けられた大庄屋は、かう云つて一座を見廻した。が、一座はしんとしてしまつた。咳拂ひ一つするものがなかつた。

「ないか。ないか。誰もないか。村一統の難儀を救ふものは誰もないか。」

大庄屋の聲は、悲痛を極めた。その時だつた。大廣間の縁側をコソ〳〵と這ひ上るものがあつた。

「誰もないか。誰もないか。」と、大庄屋が最後の聲を出した時だつた。

縁側を、コソ〳〵と這ひ上つた男は、急に立ち上つた。

「あるだ。あるだ。俺が、出るぞ。俺が出るぞ。俺や石を投げたぞ。」と、叫けんだ。

會衆は、恐ろしい沈默から放たれたやうに一齊に、歡喜とも悲鳴とも、付かないやうな聲を上げた。たゞ、その聲の中に、「何云ふだ。馬鹿を云ふぢやない！」と、絶叫して居る聲が、聞えた。それは、甚兵衛の弟の甚五の聲だつた。

五

甚兵衛に對する命乞ひの愁訴などは、何の效もなかつた。藩では、兎に角下手人が出たのを、もつけの幸ひとして、甚兵衛を香東川原に磔にかけた。が、罪は一族にも及んだ。彼の繼母及び三人の弟は、同時に首を刎られた。

重刑の者を、後にするのが、かゝる場合の定法であつた。磔の柱に上つて居る、甚兵衛に見せしめの爲に、彼の目前で、母や弟達の首を刎ねた。さうして、重罪の咎人を更に苦しめやうとした。

が、母や弟達が、甚兵衛の捲添を喰つて、不精無情に、首の座に直るのを見ると、甚兵衛は磔の柱にかゝりながら、から〳〵と止め度なく、笑ひ始めた。彼が、一生の裡に、一度も出したことのないやうな愉快な笑ひ聲だつた。

その笑ひの名殘りは、彼が磔柱の上に、息が絶えた後までも殘つて居た。

「甚兵衛樣は、笑つて死になさつた。」さう云つて、蒐まつた數萬の群衆は、百八十九ヶ村の人々に代つて死んだ甚兵衛の最後を賞めたゝへた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

義民甚兵衛の碑は、今でも香東川畔に立つて居る。

西南奇聞

自分の伯父は、西南戰爭の時に、死んだのです。が、死んだと云ふのは、簡單にさう云つたまでゝ、本當は行方不明になつたまゝ、四十年後の今日まで、其の儘になつて居るのです。さう云ふと、或る人達は云ふかも知れない、日清戰爭でも、日露戰爭でも行方不明は幾何でもある。戰爭に行方不明は、付き物だ。捕虜になつて居なければ殺されたのに、定まつて居ると。

所が、伯父の行方不明は少しは、事情が違ふのです。と云ふのは、伯父は軍人として、戰場へ出たのではないのです。官軍でも、賊軍でもないのです。たゞ一個の旅客として、戰地を通つて居る時に、行方不明になつたのです。

伯父が、戰爭中に九州に行つたことに就いては、未だ曾て世間に知られて居ない秘

密が潛んで居るのです。伯父はその當時、司法省の若手の官吏として、可なり前途を囑望されて居た有爲の青年であつたのですが、少年時代から世話になつた某大官の命を受けて、其當時熊本城外に賊兵を指揮して居た西郷南洲に會ひに行つたらしいのです。伯父が、行方不明になつたまゝ四十年にもなる今では、それが何う云ふ用向きであつたか、一向分らないのです。西郷南洲に會ひに行つたと云ふことも、私の家に云ひ傳へてある丈で、歴史上の文献などに、さうした痕跡が、少しでも殘つて居る譯ではありません。が、その某大官と云ふのは、薩閥の出で、殊に西郷隆盛とは師弟に近い關係があつたと云ふのですから、其處には後世に傳はり得ないやうな秘密が、伏在して居たのかも知れませんが、幾何師弟の關係があるにしろ、政府の大官が、妄りに賊の巨魁に、款を通ずべき譯ではなく、またその使者に、政府の官吏が、官を廢して行く譯もありませんから、或は某大官が時の政府の意を嚮けて、さうした行動に出たかも知れません。て、ないと伯父が爲したやうに、官賊兩軍の戰線を突破することが出來

ない筈てすから。伯父は兎に角、明治十年×月×日頃、丁度賊軍の攻圍の力が盡きようとする頃に、此の危險な旅行を企てたらしいのです。何でも田原坂や植木邊の戰場を避けて、菊地郡の隈府から、大津と云ふ小さい町を通り、白川を傳うて熊本に近づいたらしいのてす。云ひ忘れて居ましたが、伯父は一人ぢやなかつたのですが、何でも幸田健作と云ふ十七になる少年を件うて居たのてす。

伯父が西郷隆盛とどんな風に會見したか、また會ふた結果が、何うてあつたか、今では少しも分りません。幸田健作は、その後だん〳〵出世して、今では某控訴院の判事を務めて居ますが、何でも伯父に、茲で待つて居ろと云はれて、小さい神社の縁の下で午後の七時から、翌朝の四時まて、待ちあぐんで居る中に、子供心に恐ろしさも忘れて、ぐう〳〵寢込んで居るところを伯父に起されたさうですから、多分伯父と南洲との會見は、夜中極秘に行はれたらしいのてす。

それまては、至極無事だつたのです。それまでは賊軍の勢力範圍に居ながらも、伯

父は可なり落着いて、生命の危險などは少しも感じて居なかつたらしいのですが、それからと云ふものは、妙にそわ〳〵して、誰かに附き纏はれて居るやうな樣子を見せたそうです。さうして、少年の健作の衣類の襟の中に、小さい紙片を縫ひ付けて、

「若し、俺がやられたら、お前は何も知らないで、跟いて來たと云つて、云ひ脫けるのだぞ」と、幾度も〳〵繰り返したさうです。何でも熊本を後にして、大津と云ふ小さい町へ來たときには、夕暮で伯父も少年の健作も、グタ〳〵に疲れて居たさうです。見渡したところ、町の中には賊軍らしいものが、一人も居ず、町人に聞いて見ても、五六日前に、一小隊ばかりの人數が通つた外は、一人も見たことがないと云ふものですから伯父もつい安心したと見え、ついその町の小さい旅籠屋へ宿ることにしたさうです。

所が、あくる朝起きて見て、いざ立たうとすると、賊軍の士卒が、三々五々熊本の方へ落ちて行くさうです。伯父はそれを見ると、急に出發を見合せたさうです。それで、宿の一室で、主從は小さくなつて、日の暮れるのを待つて居たさうです。午後から、賊兵の影が途絶えて夕暮までに、ただ一人も通らなかつたさうです。さうすると、伯父は急に立たうと云ひ出したさうです。

何でもスツカリ仕度が出來て、愈々宿を出たのが、夜の八時頃だつたさうです。所が、宿を出てから、丁度二町ばかり來た時です。伯父は、急に、

「アツ！」と、叫んださうです。

健作も、伯父の叫び聲が、たゞならぬに驚いて、

「何うしたのです。何うしたのです！」と、訊いたさうです。すると、伯父は、頻りに舌打ちをしながら、

「しまつた！しまつた！」と、云つて居ましたが、暫らく考へた末、

「健！一寸待つて居るんだ。忘れ物をしたから」と、云つたまゝ、宿の方へ引つ返したさうです。

四十年も昔の田舍の街で、殊に戰爭中ですから、灯一つ見えない暗い道で、健作は顫

へ乍ら伯父の歸るのを待つて居たさうです。所が、十分經つても、伯父は歸りません。三十分待つても伯父は歸りません。仕方なしに、健作は恐々ながら宿屋まで引返して見たさうです。ところが、意外にも伯父は其處に居なかつたさうです。健作は、そんな筈はないと幾度も念を押して訊いたのです。が、宿屋の主人は――小さい宿屋で、主人夫婦の外は、五つになる女の子一人しか居なかつたさうです――あなたの御主人は、先刻あなたと一緒に出たぎりで、決して歸つて來ないと飽くまでも云ひ張つたさうです。

十七になる健作は、其處で全く途方に暮れたさうです。今ならば、直ぐ警察へ訴へるところですが、戰爭最中で、町は無政府同樣なのです。彼は、宿屋から先刻主人と分れた場所との間を、主人の名を大聲で呼びながら、馳せ廻つたさうです。宿屋の主人も、一緒に出て來て、手傳つて捜して呉れましたが、到頭伯父は何うなつたのか、皆目分らなかつたさうです。

健作は、少年に似合はず伯父に對しては可なり忠實であつたと見え、伯父の生死を

確めるために大津の町に滯在する決心をして、同じ宿屋に宿まつて、寢食を忘れて、伯父の行方を捜したさうです。

ところが、その事件があつてから、丁度三日目に熊本城の圍みが解けると共に、官軍が此の大津の町へもは入つて來たさうです。從つて町の秩序も恢復し、警察も開かれるやうになつたので、健作はその町の分署長にまで、捜索方を願ひ出でたさうです。

分署長からは、懸の當局へ上申したと見え、懸の當局からは極力捜索をするやうな命令が下つたさうです。多分伯父の身分や、使命の大體が、判明した爲だらうと思ひます。が、警察で極力盡力して呉れたにも拘はらず、伯父の行方は、到頭知れなかつたさうです。

伯父が、何うして行方不明になつたかに就いては、その當時、こんな想像説があつたさうです。伯父は、多分某大官の内命を受けて、當時戰勢の振はなかつた南洲に、投降を勸めに行つたらしいと云ふのです。無論、その大官の肚では、何うかして南洲

を助けたく、降伏さへすれば、何うにかして、生命の安全丈は計ると云つたやうな、内意を伯父に傳へさせたらしいのです。それを豪氣な南洲翁に、一言の下に斥けられると同時に、南洲の周圍の隼人連に、「何を生意氣な」と云つたやうな憤慨を買つたらしいと云ふのです。その場で「殺つてしまへ」と、逸り出す者があつたのを、南洲が極力制止した爲に、伯父は無事に歸途に付くことが出來たのだが、歸りには、伯父が何物かを恐れて居たのは、多分かうした原因の爲だらうと云ふのです。ところが、一方南洲のために制せられた隼人連は、薩摩の出身でありながら、南洲に味方もせず、却つて投降を勸めるなど、怪しからぬことだと、某大官の態度に激怒した結果、その鬱憤を霽らすために、その使者たる伯父を殺つてしまつたらしいと云ふのです。

が、その想像説は、非常に自然でありますが、たゞ一つ不審なことは、もしそんな事情で殺害したのならば、たゞ伯父の命丈を絶てばいゝのですから、屍體は當然見付からなければならぬと云ふのです。健作と分れて宿屋へ取つて返すまでの道路の何處

かに、屍骸が横はつて居なければならないと云ふのです。が、實際は屍骸はおろか、血一滴こぼれて居なかつたさうです。

一月もの間、健作はその地に止まつて、捜索しましたが、何等の手がゝりもありませんでした。警察の方でも、日が經つに從つて、愈々熱心に（政府からの特別の命令をでも受けたやうに）人數を增して、捜索したさうですが、到頭何の效果をも擧げえなかつたさうです。

所が健作が愈々大津を立たうと云ふ前日に、大津の町の直ぐ傍を流れる白川の流に、伯父が着て居る白い飛白の單衣が、見付かつたと云ふのです。何でも小供が川端へ降り立つて、岸に近い淺い水の中で、小魚か何かを追ひ廻して居る中に、ふと砂の中から、はみ出して居る着物が目に付いたさうです。子供は、何氣なく、それを掘り出して岸へ上げたところへ、大人が通りかゝつたさうですが、當時大津の人々は、みんな伯父の行方不明を知つて居たものですから、これが何かの手がかりではあるまいかと

警察へ持つて來たのださうです。

如何にも、それは伯父が着て居た衣服に相違なかつたさうです。しかも、その背の所に、丁度心臟のあたりに、二個所刀で抉つたやうな傷が、付いて居るのです。が、不思議に血に染むだ痕跡は少しもないのです。警察の意見では、多分川水の中にある裡に、スツカリ洒されて血が落ちたのだらうと云ふことでしたが、それにしては、布の地質が傷んで居ないのださうです。一月も川水の中に浸つて居たものとは、何うしても思はれなかつたさうです。

伯父の着て居た衣物が出たので、健作も警察も、勢を得て、懸命に捜索を續けたのですが、それぎりまた何の手がゝりもなかつたさうです。

で、止むを得ず、健作は十日ばかりの後、大津を立つて、長崎へ出、そこから汽船で横濱まで來て、東京へ歸つて來たさうです。

健作が東京へ歸つた後でも、捜索は可なり長い間續いたさうです。その中、賊が平

げられたので、捕へた薩兵に付いても、伯父を暗殺した者があるか、何うかと云ふことをいろ〳〵調べて見たさうですが、賊軍の方でも、當時は熊本を引き上げるドサクサ最中だから、一個人を暗殺すると云つたやうな、仕事に沒頭して居られるやうな時ではないと、云ふやうな結論になつたさうです。

伯父の父、即ち私の祖父は、秘藏兒の、しかも前途有爲な若い子の行方不明を、非常に殘念がつたと見え、西南戰爭が濟んだ翌年、自身大津へ行つて、三月もの間苦心して、捜索したさうですが、やつぱり何の手がゝりもなかつたさうです。

何しろ、戰爭の大混亂の最中ですから、人間一人の生死位、分らなくなるのも當然だつたかも知れません。

その後、警察の意見では、伯父が可なり路用として、大金を持つて居たところから、或は强盜か何かに、殺されたのではないかと云ふ捜索方針を立てたさうです。が、さうした方針の捜索も、何物をも、もたらさなかつたさうです。

が、一體一度宿を立つた伯父が、何を取りに引返したゞらうかと云ふことは、皆の疑問になつて居るのです。伯父ほどの人間が、しかも注意に注意して、危險地を旅行して居る伯父が、果して何を忘れたかと云ふことは、可なり疑問だつたさうです。しかも、宿屋の中の伯父が宿まつた室を極力捜索しても、伯父が忘れたらしいものは、紙片一枚なかつたさうです。

伯父に對する捜索が、徒勞に歸してから、三十年も經つた、明治四十年のことでした。

急に、熊本の警察署から、私の父宛に、書狀が來たのです。それに依ると、伯父の遺骨らしいものが、見付かつたから生前伯父を熟知して居る者に、ゼヒ來て貰ひたいと云ふのです。父は、取る物も取り敢ず、熊本へ急行したのです。熊本へ行つて、よく事情を訊くとかうなのです、伯父が宿まつた宿屋は、その後一時繁昌したが、日清戰爭頃に、主人が死ぬと同時に、そのころ二十二三になつた娘が、續いて後を追つた

ので、殘された女房は、家を賣つて、商賣を止めたのだが、その後が料理店になり、それが、ずつと、引き續いて商賣をして居たところ、今度は大改築をすることになつて、家を崩したり、土地を掘り返したりして居る中に、臺所の床下から、人間の骸骨が出たと云ふのです。しかも、その骸骨の後頭部の骨が、斧か何かで、打つたやうに、滅茶苦茶に碎かれて居たさうです。他殺に違ひないと云ふことになつて、いろ〳〵調べて居る中に、町の故老の中に、伯父の失踪事件を知つて居る者があつて、伯父の骸骨に違ひないと云ふことになつたのです、而も骸骨の樣子が、丁度三十年位經過して居ると云ふ鑑定らしいのです。骸骨の發見された事からの推測に依ると、伯父が何かを忘れて、取り返しに來たときに、兼て伯父の路用の大金に眼を付けて居た宿屋の主人が、伯父の油斷を見濟して、背後から一打に、擲ぐり殺したのではないかと云ふのです。さう云へば、町の老人の話に依ると、その宿屋は西南戰爭で儲けたとか云つてその後店を擴げるやら、女中を傭ふやら、可なり金のかゝることをしたと云ふのです。

當時は、何しろ戰亂中で、無警察の狀態であつたのですから、根が惡人の宿屋の主人が、伯父の大金を見て、ムラ〳〵と惡心を起したのではないかと云ふのです。

父は、さう云ふ警察の話を、聞いてから、伯父の骸骨だと云ふ骸骨を一見したさうです。が、父には、それがどうも、自分の伯父だとは思はれなかつたさうです。伯父は五尺六寸はあらうと云ふ長身ですのに、その骸骨は五尺二三寸位しかなかつたさうです。それに、伯父の體格は、もつと堂々とガッシリして居る筈だと思つたさうです。

父は、その考を警察へ云つたさうですが、警察では、仲々承服しなかつたさうです

「いやそれは、貴君の思違だ。貴君が若かつたから、兄さんが高く見えたのだ」と言つたさうですが、父には何うしても、その骸骨が肉親の兄のそれであるとは、思へなかつたさうです。

× × × ×

が、それは兎に角、その骸骨が伯父のものでないにしろ、その宿屋の主人がさうした屍骸を緣の下に埋めて置くやうな人間である以上、伯父の最後に、又別な有力な想像が加へ得ることは確なことです。

生き殘つたと云ふその宿屋の女房は、その當時警察で、調べて見たさうですが、殘念なことに四五年前熊本市で、死んで居たさうです。

マスク

見かけ丈は、肥つて居るので、他人からは非常に頑健に思はれながら、その癖内臓と云ふ内臓が、人並以下に脆弱であることは、自分自身が一番よく知つて居た。

一寸した坂を上つても、息切れがした。階段を上つても息切れがした。新聞記者をして居たとき、諸官署などの大きい建物の階段を駈け上ると、目ざす人の部屋へ通されても、息がはづんで急には、話を切り出すことが、出來ないことなどもあつた。

肺の方も餘り強くはなかつた。深呼吸をする積で、息を吸ひかけても、ある程度迄吸ふと、直ぐ胸苦しくなつて來て、それ以上は何うしても吸へなかつた。

心臓と肺とが弱い上に、去年あたりから胃腸を害してしまつた。内臓では、強いものは一つもなかつた。その癖身體丈は、肥つて居る。素人眼にはいつも頑健さうに見え

る。自分では内臓の弱いことを、萬々承知して居ても、他人から「丈夫さうだ〳〵」と云はれると、さう云はれることから、一種ごまかしの自信を持つてしまふ。器量の悪い女でも、周圍の者から何か云はれると、自分でも「滿更ではないのか」と思ひ出すやうに。

本當には弱いのであるが、「丈夫さうに見える」と云ふ事から來る、間違つた健康上の自信でも、あつた時の方がまだ頼もしかつた。

が、去年の暮、胃腸をヒドク壞して、醫者に見て貰つたとき、その醫者から、可なり烈しい幻滅を與へられてしまつた。

醫者は、自分の脈を觸つて居たが、

「オヤ脈がありませんね。こんな筈はないんだが。」と、首を傾けながら、何かを聞き入るやうにした。醫者が、さう云ふのも無理はなかつた。自分の脈は、何時からと云ふことなしに、微弱になつてしまつて居た。自分でぢつと長い間抑へて居ても、あるかなきかの如く、ほのかに感ずるのに過ぎなかつた。

醫者は、自分の手を抑へたまゝ一分間もぢつと默つて居た後、

「あゝ、ある事はありますがね。珍らしく弱いですね。今まで、心臓に就て、醫者に何か云はれたことはありませんか。」と、一寸眞面目な表情をした。

「ありません。尤も、二三年來醫者に診て貰つたこともありませんが。」と、自分は答へた。

醫者は、默つて聽診器を、胸部に當てがつた。丁度其處に隱されて居る自分の生命の祕密を、嗅ぎ出されるかのやうに思はれて氣持が悪かつた。

醫者は、幾度も〳〵聽診器を當て直した。そして、心臓の周圍を、外から餘すところないやうに、探つて居た。

「動悸が高ぶつた時にでも見なければ、充分なことは分りませんが、何うも心臓の辨の併合が不完全なやうです。」

「それは病氣ですか。」と、自分は訊いて見た。

「病氣です。つまり心臓の辨が缺けて居るのですから、もう繼ぎ足すことも何うする

ことも出來ません。第一手術の出來ない所ですからね。」

「命に拘はるでせうか。」自分は、オヅ〳〵訊いて見た。

「いや、さうして生きて居られるのですから、大事にさへ使へば、大丈夫です。それに、心臟が少し右の方へ大きくなつて居るやうです。あまり肥るといけませんよ。脂肪心になると、ころりと衝心してしまひますよ。」

醫者の云ふことは、一つとしてよいことはなかつた。心臟の弱いことは兼て、覺悟はして居たけれども、これほど弱いとまでは思はなかつた。

「用心しなければいけませんよ。火事の時なんか、馳け出したりなんかするといけません。此間も、元町に火事があつた時、水道橋で衝心を起して死んだ男がありましたよ。呼びに來たから、行つて診察しましたがね。非常に心臟が弱い癖に、家から十町ばかりも馳け續けたらしいのですよ。貴君なんかも、用心をしないと、何時コロリと行くかも知れませんよ。第一喧嘩なんかをして興奮しては駄目ですよ。熱病も禁物ですね。チブスや流行性感冒に罹つて、四十度位の熱が三四日も續けばもう助かりつこはありませんね。」

此醫者は、少しも氣安めやごまかしを云はない醫者だつた。が、嘘でもいゝから、もつと氣安めが云つて、欲しかつた。これほど、自分の心臟の危險が、露骨に述べられると、自分は一種味氣ない氣持がした。

「何か豫防法とか養生法とかはありませんかね。」と、自分が最後の逃げ路を求めると、

「ありません。たゞ、脂肪類を喰はないことですね。肉類や脂(あぶら)つこい魚などは、なるべく避けるのですね。淡泊な野菜を喰ふのですね。」

自分は「オヤ〳〵」と思つた。喰ふことが、第一の樂しみと云つてもよい自分には、かうした養生法は、致命的なものだつた。

かうした診察を受けて以來、生命の安全が刻々に脅かされて居るやうな氣がした。

殊に、丁度その頃から、流行性感冒が、猛烈な勢で流行りかけて來た。醫者の言葉

に從へば、自分が流行性感冒に罹ることは、即ち死を意味して居た。その上、その頃新聞に頻々と載せられた感冒に就ての、醫者の話の中などにも、「心臟の强弱が、勝負の別れ目」と云つたやうな意味のことが、幾度も繰り返へされて居た。

自分は感冒に對して、脅え切つてしまつたと云つてもよかつた。自分は、出來る丈豫防したいと思つた。最善の努力を拂つて、罹らないやうに、しようと思つた。他人から、臆病と嗤はれやうが、罹つて死んでは堪らないと思つた。

自分は、極力外出しないやうにした。妻も女中も、成るべく外出させないやうにした。そして、朝夕には過酸化水素水で、含漱をした。止むを得ない用事で、外出するときにはガーゼを澤山詰めたマスクを掛けた。そして、出る時と歸つた時に、丁寧に含漱をした。

それで、自分は萬全を期した。が、來客のあるのは、仕方がなかつた。風邪がやつと癒つたばかりで、まだ咳をして居る人の、訪問を受けたときなどは、自分の心持が暗くなつた。自分と話して居た友人が、話して居る間に、段々熱が高くなつたので、

送り歸すと、その後から四十度の熱になつたと云ふ報知を受けたときには、二三日は氣味が惡かつた。

毎日の新聞に出る死亡者數の增減に依つて、自分は一喜一憂した。日毎に增して行つて、三千三百三十七人まで行くと、それを最高の記錄として、僅かばかりではあつたが、段々減少し始めたときには、自分はホッとした。が、自重した。二月一杯は殆んど、外出しなかつた。友人はもとより、妻までが、自分の臆病を笑つた。自分も少し神經衰弱の恐病症（ヒポコンデリヤ）に罹つて居ると思つた。が、感冒に對する自分の恐怖は、何うにもまぎらすことの出來ない實感だつた。

三月に、は入つてから、寒さが一日一日と、引いて行くに從つて、感冒の熱威も段段衰へて行つた。もうマスクを掛けて居る人は、殆どなかつた。が、自分はまだマスクを除けなかつた。

「病氣を怖れないで、傳染の危險を冒すなどゝ云ふことは、それは野蠻人の勇氣だよ。

病氣を怖れて、傳染の危險を絶對に避けると云ふ方が、文明人としての勇氣だよ。誰も、もうマスクを掛けて居ないときに、マスクを掛けて居るのは變なものだよ。が、それは臆病でなくして、文明人としての勇氣だと思ふよ。」

自分は、こんなことを云つて友達に辯解した。又心の中でも、幾分かはさう信じて居た。

三月の終頃まで、自分はマスクを捨てなかつた。もう、流行性感冒は、都會の地を離れて、山間僻地へ行つたと云ふやうな記事が、時々新聞に出た。が、自分はまだマスクを捨てなかつた。もう殆ど、誰も付けて居る人はなかつた。が、偶に停留場で待ち合はして居る乘客の中に、一人位黑い布片で、鼻口を掩ふて居る人を見出した。自分は、非常に頼もしい氣がした。ある種の同志であり、知己であるやうな氣がした。自分は、さう云ふ人を見付け出すごとに、自分一人マスクを付けて居ると云ふ、一種のてれくさゝから救はれた。自分が、眞の意味の衞生家であり、生命を極度に愛惜する點に於て一個の文明人であると云つたやうな、誇をさへ感じた。

四月となり、五月となつた。道の自分も、もうマスクを付けなかつた。ところが、四月から五月に移つる頃であつた。また、流行性感冒が、ぶり返したと云ふ記事が、二三の新聞に現はれた。自分は、イヤになつた。四月も五月もになつて、まだ充分に感冒の脅威から、脱け切れないと云ふことが、堪らなく不愉快だつた。

が、道の自分も、もうマスクを付ける氣はしなかつた。日中は、初夏の太陽が、一杯にポカ〳〵と照して居る。どんな口實があるにしろ、マスクを付けられる義理ではなかつた。新聞の記事が、心にかゝりながら、時候の力が、自分を勇氣付けて呉れて居た。

丁度五月の半であつた。市俄古の野球團が來て、早稲田で仕合が、連日のやうに行はれた。帝大と仕合がある日だつた。自分も久し振りに、野球が見たい氣になつた。學生時代には、好球家の一人であつた自分も、此一二年殆んど見て居なかつたのでゐ

る。

その日は快晴と云つてもよいほど、よく晴れて居た。青葉に掩はれて居る目白臺の高臺が、見る目に爽やかだつた。自分は、終點で電車を捨てると、裏道を運動場の方へ行つた。此の邊の地理は、可なりよく判つて居た。自分が、丁度運動場の周圍の柵に添ふて、入場口の方へ急いで居たときだつた。ふと、自分を追ひ越した二十三四ばかりの青年があつた。自分は、ふとその男の横顔を見た。見ると、その男は思ひがけなくも、黑いマスクを掛けて居るのだつた。自分はそれを見たときに、ある不愉快な激動(ショック)を受けずには居られなかつた。それと同時に、その男に明かな憎惡を感じた。その男が、何となく小憎くらしかつた。その黑く突き出て居る黑いマスクから、いやな妖怪的な醜くさをさへ感じた。

此の男が、不快だつた第一の原因は、こんなよい天氣の日に、此の男に依つて、感冒の脅威を、想起させられた事に違なかつた。それと同時に、自分が、マスクを付け

て居るときは、偶にマスクを付けて居る人に、逢ふことが嬉しかつたのに、自分がそれを付けなくなると、マスクを付けて居る人が、不快に見えると云ふ自己本位的な心持も交じつて居た。が、さうした心持よりも、更にこんなことを感じた。自分があの男を、不快に思つたのは、强者に對する弱者の反感ではなかつたか。あんなに、マスクを付けることに、熱心だつた自分迄が、時候の手前、それを付けることが、何うにも氣恥しくなつて居る時に、勇敢に傲然とマスクを付けて、數千の人々の集まつて居る所へ、押し出して行く態度は、可なり徹底した强者の態度ではあるまいか。兎に角自分が世間や時候の手前、やり兼ねて居ることを、此の青年は勇敢にやつて居るのだと思つた。此の男を不快に感じたのは、此の男のさうした勇氣に、壓迫された心持ではないかと自分は思つた。

天の配罪

自分が京都に居たとき、いろ〳〵な物が安かつた。食費が月に六圓だつた。朝が六錢で晝と晩が八錢づゝだつた。一日二十二錢の譯なのだが、月極めにすると二十錢に負けて呉れるのだつた。素人の家の間を借りて居たが、間代が二圓だつた。尤も、自分は大學生として、最もつましい生活をして居たには違ない。が、食と住とが僅か十圓以下で足りたかと思ふと、隔世の感がある。

二十圓足らず送つて貰つて居た學費でも、さう不自由もしなかつた。その頃の五圓十圓は、それほど有難かつた。

大正二年の十一月だつた。河合武雄の公衆劇團が京都へ來た。一番目が「茶を作る家」と云ふ狂言だつた。愛蘭土劇を、飜案したものだつた。友人の久米が、東京で見

て、面白いから是非見ろと云ふハガキを寄越して來た。その頃、近代劇を專攻して居た自分は、今よりも、芝居に對して熱心だつた。自分は初日が開くのを、待ちあぐんで居た。忘れもしない十一月八日が初日だつた。丁度土曜日だつた。

その時自分の墓口には、六圓と幾何かあつた。それがその月中の小遣だつたのだ。京都座の前で、自分は何等を買はうかと、一寸思案した。が、その頃は極度に節儉だつた自分は、四等を買つてしまつた。三十錢の觀覽料が、初日だつたので半額の十五錢だつたのだ。

汚い四等席の疊の上に、自分は腰を落付けた。が、自分はこんなことを考へた。たとへ、四等に蹲くまつて居ても、茲に集まつて居る見物の殆ど凡てよりも、芝居に付いては、分つて居るのだ。さう思ふと、淋びしい痞我慢が出來た。自分は、可なり熱心に見て居た。

一幕目が了つたときだつた。自分の横へ、一人の職人風の若い男が來て坐つた。青

い捧縞の汚い着物を着て居た。

「これ、何と云ふ芝居だすか。」と、云つたやうな調子で、狂言に對する自分の註釋を求めた。芝居に對する智識を、内心で得意にして居た自分は、さう訊かれると、得意になつて話し出した。公衆劇團の性質やら、狂言の主題や、新劇運動の主旨と云つたやうなものを、得意になつて話したやうに覺えて居る。若者は、熱心に聽いて居るやうな風をして居た。

二幕目が始まる前に、自分は便所へ立つた。席へ歸らうとしたときに、もう幕が開いて居た。强いて歸るほどの席でもなかつた。廊下へも澤山の人が立つて見て居たので、自分も其處で立つて見ることにした。さうした方が、四等席で見るよりも、よく見えたのである。二幕が、もう了りかけた時であつた。四十ばかりの女が、自分の背後から靠れかゝるやうにした。自分は、その容子を變に思つた。自分は掏摸ではないかと、直覺的に思つた。自分は、急いで左の袂を探つて見た。自分が怖れた通り、墓

口が無くなつて居たのである。念のために、右の袂を探ぐつた。が、其處に自分の手に觸れたのは、堅い下足札丈であつたのである。

自分は、てつきりその四十女が、盜んだものと確信した。

「君は、僕の墓口を知らないか。」と、自分はそんな風に、露骨に云ひ出したやうに記憶して居る。

「まあ！　けつたいもないこと云ひなはんな。」と、その女も怒つた。自分達が、二三度押し問答をして居る内に、相手の女は二三人の味方を得た。氣が付くと、その女は劇場のお茶子であつたのである。同類らしい女達が、見る〳〵内に、七八人も集まつた。口不調法な自分は、手もなく云ひくるめられてしまつた。その中に、相手の方には、お茶子の取締らしい男まで加はつてしまつた。

その四十女は、可なり周圍の者から、信用があるらしかつた。自分が、幾何云ひ爭つても、何も證據はなかつた。おしまひには、自分の方が旗色が惡くなつて、謝罪まで

でさされさうになつた。自分は、口惜しかつた。金を取られた上に散散云ひくるめられて謝罪まで、せなければならないやうになつたのが、殘念だつた。自分は、臨場の巡査にまで訴へた。が、少しも取り上げては呉れなかつた。お茶子達の云ひ分を、信じて居るらしい巡査は、その女を調べて見ることさへしなかつた。

が、自分もその中に、ふと四等席で、自分の横に坐つて居た若者の事を、思ひ付いた。自分が、芝居のことを訊かれて、得意になつて、喋べつて居るときに、まんまとやられたのだと云ふ氣がした。自分は、さう氣が付くと直ぐ、四等席に歸つて見た。其の若者は、もう其處には居なかつた。

芝居を見る氣持などは少しも殘つて居なかつた。その月中の小遣を、スッカり盜られてしまつた上、間違つた云ひがゝりをして、散々やつ付けられたことが、可なり不愉快であつた。快々として、少しも樂しまなかつた。他人から學資を仰いで居た自分は、他に一錢だつて算段する當はなかつた。一文も小遣なしに、その月中は辛抱しな

ければならなかつたのだ。自分はケチ〳〵して四等には入つた事までが、不快であつた。盗られてしまふ金だつたら、十錢でも二十錢でも、澤山使つておけばよかつたと思つた。

月末まで、二十日あまりも、一文もなしに暮さねばならぬことを思ふと、自分は消氣切つてしまつた。

翌日は、日曜日だつた。平素は早く起きる自分だつたが、その日は起きる元氣がなかつた。十二時過ぎになつてから漸く起き上つた。自分は、起きると下へ行く梯子段に萬朝報が置いてあるのを取り上げた。京都では東京の各新聞は丁度一時頃に配達されるのだつた。自分は、何氣なく萬朝報を取上げた。その日は、丁度日曜であつた。自分が、ふと四面へ目をやると其處に、自分が二月も前に投書した、懸賞小説が當選して居るのだつた。投書してから一月位は、當選するか〳〵と待つて居たが、幾何待つても出ないので、もうスッカリ忘れて居たのであつた。

自分は、近き過去に於て、此時位嬉しいことはなかつた。その時に得た懸賞金の十圓位、有難く忝い金はなかつた。自分は嬉しさの餘り、思はず涙ぐんだほどだつた。その時まで、自分は運命と云ふものを、全體として惡意のあるものだと感じて居た。が、此時初めて馬琴の小説にあるやうに、天の配罪と云ふことを感じた。攝理と云ふやうなことを感じた。

自分は、其懸賞金を受取ると、盗難に逢つた六圓を補つた殘りて、晩秋の大和へつましい小旅行を企てたのであつた。

ある青年

一二年前から、自分に手紙を呉れる關西の少年があつた。神戸に近い町の少年だつた。自分も三度に一度位の割合で、返事を書いた。作者と愛讀者との此文通は、割合長く續いた。その町の土産などを送つて呉れた。

昨年所用があつて、大阪へ行つたとき、自分は此の少年と會つた。此少年は、無論自分に會ふために、大阪へ來たのだつたが、會ひ方が可なり偶然だつた。自分が、大阪の丸善へ行つて居るとき、其處に居合はした一人が名乘りかけて來たのが、此少年であつた。何でも、自分の宿屋を訪ねて留守だつたので、一寸丸善へ寄つたとの事だつた。廣い大阪で、偶然逢ふと云ふことが、一寸奇遇のやうな氣がした。

少年は、その時自分に、町の物産らしい燒き物を呉れた。自分は、その純朴な好意〃嬉

しく思つた。が、旅行中で持て餘したので、知合になつた人に呉れた。少年とは、その時一度合つた切りで、何かの都合でロク〳〵話もしないで分れたまゝ、大阪を去つた。

自分と會つたのを、轉機としたやうに、此少年にいろ〳〵不幸が襲つて來たらしい。自分が歸京してから、間もなく此少年が、突然父を失つたと云ふ報知を受け取つた。それに續いて、大事な姉を失つたと云ふ手紙を受け取つた。自分は、二度ともそれに對して、哀悼の手紙を送つた。が、其裡に少年の手紙が、だん〳〵センチメンタルになり、たわいもない悲嘆が續くやうになつたので、自分は返事の仕樣がなかつた。自分は、手紙を貰ひぱなしにして返事をしなかつた。その裡に、少年からも手紙が來なくなつた。

所が、つひ此間自分は、突然此少年の來訪を受けた。此少年が上京したと云ふことを少しも知らなかつた自分は、可なり駭いた。少年は名刺に青年改造會々員と云ふ肩書を、ペンで書いて居た。その事も、自分には可なり意外だつた。會つて見ると、去年見たやうな少年らしい面影は、スッカリ無くなつて居た。もう大人に近い青年にな

り切つてしまつて居た。それよりももつと驚いたことは、此少年の思想や話し振が、半年の間に激變して居ることだつた。去年會つた時、少年は、たわいもない世間並な文學愛好者だつた。自分に寄越した手紙なども、甘つたるいセンチメンタルな子供子供した手紙だつた。それだのに、僅か半年の間に、もうスッカリ一個の立派な青年社會主義者と云つたやうな者に、なり切つて居るのだつた。

少年の話に依ると、彼は境遇の激變のために、大阪で職工になつたのだつた。そして、三月ばかりの職工生活の間に、スッカリ社會主義の洗禮を受けたらしかつた。

自分を前にして、日本の社會主義者の批評や、社會主義者の品隲をした。自分などが雜誌などで讀んで居ることと、餘り違つて居なかつたが、然しそれが生々とした實感で語られるのだつた。それから話は進んでギルドソーシャリズムだとか、サンジカリズムだとか過激主義とかソヴヰエットなどの話をした。ウヰリヤムモリスとか、ジョオジムーアなどの社會主義文學者などの名前まで、引き合に出して、いろ〳〵な事を話した。